



アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳 注(8)

真下, 裕之(監修・訳注)

二宮, 文子(訳注)

和田, 郁子(訳注)

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 47:81-128

(Issue Date)

2020

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012056>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012056>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』訳注(8)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

<I, 111>

様々な色の発現の規則

色の中では、白と黒が根源と考えられ、両極とみなされている。残りの色はこの二つの配合の結果(naṣibah)であるとみなされている¹。多量の白が少量の黒と混ざると黄色が現れる。等量の白と黒からは赤が、白と多量の黒からは緑が姿を現す。他の様々な色は、それぞれの組合せから現れる。また、冷たさは湿った物体を白く、乾いた物体を黒くする。熱さは水気のある物体を黒く、乾いた物体を白くする。これらの要因【冷たさや熱さ】は、受容するものとそれに作用する天体(kawākib)の影響によって、それぞれ変化を与えるのである²。

* 青山学院大学文学部准教授

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

1 Abū al-Faḍlが「アルバム序文」で挙げている(注5参照) Ibn Sīnāの『治癒の書』*Kitāb al-ṣifā'*「自然学」(Ṭabīʿiyāt)の第六篇『魂について』*al-Nafs*の第3部「視覚」の中で見られる色彩論は、物体上の具体的な色の発現というよりは、視覚による色の知覚と光の関係に関する議論が主になっている。ただし、諸説を紹介する節において、白と黒の配合によって赤や黄色などが発現するという説が、典拠を挙げずに触れられている[*Ṣifā'* (Ṭabīʿiyāt 6) : 90, 109-110; *Ṣifā'* (Ṭabīʿiyāt 6) (Jtr.): 134-135]。(N)

2 Blochmannはこの部分を「これらの要因は物体にそれぞれ影響を与えるが、それは、

描写の館 (taşwîr-ḥānah) の規則

写像 (ṣūrat) は自らの本体を示し、それは本質を示す。文字の姿が話音 (ḥarf) や言葉 (lafz) に導き、さらにそれがその意味へと導くように。普通、描写は存在の幻を描くものだが、ファラングの職人たちは被造物の本質を大変驚くべき写像で描き、外見のみを見る者たちにとっては実在のものと見えるほどである。一方で、文字からは過去の人々の経験が手に入り、それは知恵の発展の手段となる。それゆえ、まず、描写の館のうち選りすぐりの部門である書籍の館について示そう³。

世界の主人たる御方は多くの注意を払い、写像と本質に深い眼差しを注がれている。実に、【文字は】善きものを好む者たちの眼差しにおいては有限の光の顕現の場であり、深い見識を持つ者たちの目においては世界を示す無限の杯である。文字という護符は、創造という筆による霊的な図形であり、運命という手による天の書板 (kitābah) である⁴。また、それは言葉 (suḥan) の秘密を守るものであり、手にとっての舌のようなものである。言葉はその場にいる者たちの心に力を <I, 112> 与える。文字は遠き者にも近き者にも知識を伝える⁵。

【色が発現する】物体は受容するものであり、天体の影響を受けるもの (muqtaza) でもあるからである」と訳している [AA (Etr.): I, 102]。 (N)

3 Blochmannはこの一節を as it is more important of the two arts と訳しているが、ペルシア語原文に即さない解釈なので従わない [AA (Etr.): I, 103]。 (M)

4 「霊的な図形」 rūḥānī-handasah. Mir 'Alī Harawī の書道論 *Midād al-Ḥuṭūṭ* (1519/20 年成立) は「文字は物質的な道具によって現れる霊的な図形である」というプラトン *Aflātūn* の所説を引いている [MKh: 90]。 (M)

5 この箇所以下の本文は、次段落の末尾「視覚の街道から戻るのである」まで、Abū al-Faḍl が「王のアルバム」 *murraqqa-i bādšāhi* のために執筆し、*Inšā-yi Abū al-Faḍl* に採録されて伝わる「序文」 *ḥuṭbah* (以下「アルバム序文」) の一節と同じ内容を含む [IAF: 259]。「アルバム序文」の末尾では「確固たる敷居の地に座する Abū al-Faḍl bun Mubārak の拙筆によって記されたるこの飾られたる書物から要約が作成された」 [IAF: 265] とあるが、もし「この飾られたる書物」が本書 AA を、また「要約」が「アルバム序文」のことを指すなら、この二つの類似テキストの関係は明らかである。「アルバム序文」の執筆年代は定かでないが、アルバム本体が王子 Salīm (後の Ḡahāngir) の主導のもとイラーヒー第 40 年の初頭すなわち西暦 1595 年春分ごろに完成したとされているから [IAF: 262]、「アルバム序文」の作成はそれ以降のいずれかの時期となる。一方、本書 AA の完成時期は 1595 年春分以降一年間のいずれかの時期と考えられるか

文字がなければ、言葉は命を持たず、過去の者たちの所産が心に届くことはなかっただろう。写像を見る者たちは【文字を】ただの黒い姿と考えるが、本質を重んじる者たちは知恵の灯火と考える。文字は何千もの煌めきを伴う暗闇である。いやむしろ、未熟な目の者たちにとっての黒点を伴う光である。知恵を描くものであり、本質という領域の黒土 (sawād) である⁶。太陽を生み出す闇夜、知識の雨を降らせる黒雲である。【文字は】見識の宝庫に付された驚くべき護符である。それは黙しつつ語り、留まりつつ動き、地にありながら高く飛ぶのである。

神の知の宝庫から、話す力を持つ魂に光が射すと、心が⁷それを抽象と具象の境界である想像の領域に送る。すると、属性を帯びたものの抽象化、限定されたものの非限定化が生じる。そこから【その光は】舌の上に歩みを進め、空気

ら〔真下1999: 50-54〕、本書が「アルバム序文」の源泉であるという見立てに、年代上の不合理はない。Blochmann も本書AAの内容が「アルバム序文」に転載された、と説明している〔AA (Etr.) : I, 106, n. 1〕。ただし、後続の注8、9および本訳注末尾の【補注】に示した対照の一例のごとく、「アルバム序文」のテキストは本書のそれよりも多くの内容を含んでいるケースが少なくない。さらに注13において示されるごとく、イブン・スィーナーの所論の典拠を『治癒の書』と特定するなど、本書の内容を「アルバム序文」が補う箇所もあることから、「アルバム序文」は本書の単なる縮小版ではなく、特有の史料価値を備えたテキストと認めるべきである。なお、Akbar 治世末期に王子 Salim が主導して製作を始めさせたアルバムとしてはいわゆる「サリーム・アルバム」と「グルシャン・アルバム」が知られているが、両者はいずれも絵画と名筆の集成である。しかるに「アルバム序文」の内容はもっぱら文字を主題としているので、そのような書画帖の序文として書かれたとは考えにくい。また「サリーム・アルバム」も「グルシャン・アルバム」も、そこに集録された絵画の年代は1600年以降とされているので、「アルバム序文」の作成年代とはかけ離れている。それゆえ「王のアルバム」をこの二つのアルバムのいずれかに同定する十分な根拠はないというべきである。そうすると従来未知の第三のアルバムの存在が浮上することにもなるが、これについても十分な情報はない。(M)

6 「アルバム序文」は「知恵の地平、いやむしろ、本質の領域という広大な黒土を描くものである」となり、構文が異なる [IAF: 259]。当該箇所のラテン文字転写は【補注】を見よ。(M)

7 この箇所に対応する「アルバム序文」のテキストは、主語を「心」ではなく、「心の持ち主」(sultān-i dil) としている。また後出する本文の「天空を行くこの旅人を」「指先の助けによって進ませる」主語は文脈上、「心」と解するべきであろうが、「アルバム序文」のテキストは「心の統御者」(farmān-rawā-yi dil) となっている [IAF: 259]。当該箇所の文脈については【補注】を見よ。(M)

の助けを借りて耳の窓に入る。その後、徐々に属性の荷を肩から下ろし、自らの場所に戻る。一方、天空を行くこの旅人【光】を、【心が】指先の助けによって進ませることもある。【光は】そこから筆墨の海陸を遍歴し、紙面という憩いの場に荷をほどいて、視覚の街道から戻るのである⁸。

文字は話音を示すものなので、それについて少々記し、理解の灯火とする説明は不可避である⁹。話音は空気の様相に依存する特定の現象である。二つの堅いもの¹⁰が強くぶつかる場合、それは衝突 (qar') と言われる。もし激しく離れると、それは破裂 (qal') と呼ばれる。【二つの堅いものの】間にある空気が水のように波打ち、それによってある現象が生じると、それは音声 (āwāz) と名付けられる。【音声の発生源から】遠くにある原因を説明し、声 (ṣawt) とは空気の波動であると言う者たちもいれば、近くにある原因を【説明し】、声とは激

8 「アルバム序文」は、本書の以上の箇所に対応する記述の後、さらに次のような説明を続ける。「また知らねばならぬ。心の知識の館から、外面の実践の家へと向かう旅人にはいずれであれ、すでに述べた宿所の数々とは別に、四つの宿所がある。それは内実の旅団がそこを通過するはずのところである。そしてそれは四つの状態のことを指す言葉である。すなわち、第一はそのはたらきについて思慮する心の中に現れるもので、それは心情 (ḥāṭir) と名付けられ、魂の軌跡 (ḥadīṭ-i nafs) と呼ばれる。第二は、心を引き付けるもので、動悸を起こさせるものである。これは意欲と興奮と呼ばれる。第三は、心が重大な決意をするところである。第四は、そのはたらきが秘匿の帳から顕現の場へと急ぐところである。見識を追求する者は、この内実の奥に座るものどもが往来する宿所と段階の数々について、深い洞察を致さねばならない。そうすれば、自存 (taḡarrud) と依存 (ta'alluq) の真理の数々について、覚知することができるだろう」[IAF: 259-260]。(M)

9 以下の本文は、同段落の末尾まで「アルバム序文」の一節と重なる [IAF: 260-261]。ただし「アルバム序文」にはその一節に先行して、描写 (taṣwīr) と文字との関係についてかなり長い記述が付け加えられており、そこでは「文字 (ḥaṭṭ) とは、各々の集団が意味や意図の理解や伝達のために定めてある話音の外貌 (ṣuwar-i ḥurūf) を、特定のやり方で記すという特別な描写である」と説明されている [IAF: 260]。(M)

10 「二つの堅いもの」 dū ṣulb に対して、「アルバム序文」は「堅くて互いにおつかりあう二つの物」 dū ḥiz kih ṣulb wa muṣādim-i yak-dīgar bāṣand という文言になっている [IAF: 261]。(M)

しい衝突あるいは破裂であるとする者たちもいる¹¹。また、高さ¹²、低さ、鼻にかかること、喉の重さから発する掠れといった他の状況も声を発生させる。そして、調音点 (*maḥārīḡ*) や気流の分節に応じて、別の状況も声を発生させ、二つの高音、二つの低音、二つの鼻音、二つの掠れ音がそれぞれ分かれる。これは話音と呼ばれる。これはイブン・スィーナ (pūr-i Sinā) の見解である¹³。知識が豊富な者たちの一部は、特定の状況で発生したもののみを話音とみなす。一方、深い見識を持つ一団は、発生させるものと発生したものの総体を話音と呼ぶ。実に、後者の見解が真実に近い。

ヒンド語 (Hindi) には52の、ユーナーン語 (Yūnānī) には某¹⁴の、ペルシ

11 この一文について、底本のテキストには混乱がある。「遠くにある原因」*sabab-i ba'id* を Ms. A および Ms. C は「近くにある原因」*sabab-i qarib* とする一方、底本の「近くにある原因」の箇所を Ms. A および Ms. C は「遠くにある原因」としている。つまり二つの形容詞「遠い」*ba'id* と「近い」*qarib* の配置が異なっているわけである。底本に従って本文を解釈すれば、「遠く」「近く」とは音声の発生源 (調音点) からの距離を意味していることになるし、諸写本の異文に従えば、それは音声の聴取者からの距離を意味していることになる。しかるに「アルバム序文」は、「そして一部の識者たちの意見では、音声とは空気の波動であると、近くにある原因によって音声理解されている。また一部の人々は、音声とは激しい衝突ないし破裂であると、遠くにある原因に帰している」[IAF: 261] となっており、諸写本の異文に即した説明になっている。(M)

『治癒の書』の『魂について』第2部「聴覚」の中では、音が衝突 (*qar'*) や破裂 (*qal'*) そのものか、あるいはそれらによって空気に発生する波動か、あるいはそれらから生まれる第3のものか、という議論が見られる。ただし、その議論においては、「遠く」あるいは「近く」の原因という表現は見られない [Šīfā' (Ṭabī'iyāt 6) : 83-84; Šīfā' (Ṭabī'iyāt 6) (Jtr.) : 100-101]。(N)

12 *zīr*. 底本 I, 47 頁に既出。この語を (音域が) 高いと訳することについては、訳注 (3) の 138 頁を参照されたい [AA (Jtr.) (3) : 138]。先の箇所と同様、Blochmann はこの語を *piano* (弱音) と訳しているが、従わない [AA (Etr.) : I, 104]。(N)

13 「アルバム序文」のテキストは「シャイフ・アブー・アリー・スィーナは、『治癒』において、この声の特有の現象を話音と言っている」とあり、典拠の文献を特定している [IAF: 261]。(M)

本文中の話音に関する説明が『治癒』のどの部分に基づくかは特定できていない。なお、Ibn Sinā の著作『話音の形成法』*Asbāb ḥudūt al-ḥurūf* においては、アラビア語の子音それぞれや、その他の話音が発生する解剖学的な原理について個別の説明がなされている [谷口 1981]。(N)

14 *fulānī*. B 写本は底本と同様で、A 写本、C 写本では *fulān* となっている [AA Ms. A: 47v; AA Ms. B: 53r; AA Ms. C: 41v]。もともと空欄であったか、後で数字を書き入れる予定で仮に入れていた語がそのまま残ってしまったものか。(N)

ア語には18の話音がある¹⁵。アラビア語には28あり、18種類の文字形によって表現される¹⁶。ハムザをアリフと区別しないなら、語中形では15である¹⁷。単独文字群のあとにラームとアリフの合字が説明されるのは、無母音文字 (sākin) は、一つの話音との結合が許容されるのが必然だからである。ラームの特徴¹⁸は、それがアリフの中心 (dīl) であり、アリフはその中心であることによる¹⁹。古の時代には母音記号 (i'rāb) はなかった。ある者たちは<I, 113>異なった色で書かれた点で印を付けていた。文字の上の赤い点が短母音のaを表していた。短母音のuのためには前に、短母音のiには下に点を打っていた。ハリール・ブン・アフマド・アルズイー²⁰は、全ての母音記号を今日巷間にあるような姿

15 「ヒンド語」やペルシア語の話音数についてのこの記述が、何らかの文献の情報に基づくものか、あるいはアクバル時代に用いられていたそれぞれの言語の実態に基づくものかは特定できない。(N)

16 ここでは、bāとtāとtāなど、アラビア文字の文字線の形が共通するものが一つの文字形とみなされていると考えられる。「アルバム序文」テキスト欄外にも同様の解釈を示す注が付されている [IAF: 261, n.5]。なお、QKhは、アラビア文字の形をbā, ġim, dāl, rā, sīn, šād, tā, 'ayn, fā, qā, kāf, lām, mim, nūn, wāw, hā, lā, yāの18種類に分けて解説している。QKhとAAの関係については注37参照 [QKh: 302-305]。(N)

17 語中ではbāと文字線が同形となるnūnとyāなどを除いた数であると考えられる [AA (Etr.): I, 104-105]。なお、「アルバム序文」では、この段落冒頭からここまでのテキストは「話音の真実が明らかにされたが、【話音の】数については、それぞれの集団で様々に異なると知れ。そして、この至高のアルバムを構成している文字については、もしハムザとアリフを区別しないなら【話音は】28で、18の形をとると証明されている。そうでなければ29である」となっている [IAF: 261]。(N)

18 底本はAHṢṬAŞだが、諸写本に従いihṭiṣāşと訂正した [AA Ms. A: 47v; AA Ms. B: 53r; AA Ms. C: 41v]。(N)

19 Blochmannは、「alifという【3文字の】単語の中心の文字がlāmであり、lāmという【3文字の】単語の中心の文字がalifであることによる」と訳している [AA (Etr.): I, 104-105]。また「アルバム序文」は、「ラームの特別さの原因は、ラームの中心 (dīl) がアリフであり、アリフの真ん中がラームである、ということである」という、より明瞭な説明を与えており、この文に付された「アルバム序文」の欄外注釈は「発音上のラームにおいては、文字としてのラームと文字としてのミームの間に文字としてのアリフが位置している。また発音上のアリフにおいては、文字としてのアリフと文字としてのファーの間に文字としてのラームが位置している。こうして、この二つの文字の間に筆記上の一体性があるということゆえに、合字が生じるのである」と、Blochmannと同じ主旨の解説をしている [IAF: 261]。(M)

20 Ḥalīl b. Aḥmad 'Arūḍī. Başraで活動した、最初期のアラビア語文法学者で、著名な文法学者Sibawayhの師。最初のアラビア語辞書Kitāb al-'aynの原案を作成したとされ

に定めた²¹。

聡明な者には明らかなように、文字の美しさは、文字に関する他の指標 (marātib) と同じく、見る者の違いによって相違を来とし、それぞれの集団がおのおの心惹かれて楽しんでいるのである。例えば、ヒンド文字 (Hindī)²²、シリア文字 (Suryānī)、ユーナーン文字 (Yūnānī)、ヘブライ文字 (ʿIbrī)、コプト文字 (Qibṭī)、マアキリー文字 (Maʿqilī)²³、クーフィー文字 (Kūfī)、カシュミール文字 (Kašmīrī)²⁴、アビシニア文字 (Ḥabašī)²⁵、ライハーニー文字 (Rayḥānī)²⁶、アラビア文字 (ʿArabī)、ペルシア文字 (Pārsī)²⁷、ルーム文字 (Rūmī)、ヒムヤル

る。没年には791年、786年、776年などの説がある。彼がアラビア文字の母音記号の形を現在のような形にしたという情報は、9世紀以降の史料で見られるようになるという [Gruendler (EQ) : Arabic Script; Sellheim (EI2) : al-Khalil b. Aḥmad]。なお、本文に記されている、アラビア語の母音を文字の上下に分別点をつけて示す手法の発案は、正統カリフʿAlīの支持者であったAbū al-Aswad al-Duʿālīに帰される [Fleisch (EI2) : Kasra; Fück (EI2) : Abu'l-Aswad al-Duʿālī]。(N)

21 「アルバム序文」では、この後に以下のような文章が続く。「また、文字は2種類に分けられる。【一つは】印付き (muʿḡamah)、すなわち点がついている文字である。印をつける (iʿḡām) とは、曖昧さの除去という意味である。点がついていない文字を印無し (muhmalah) と呼び、それには点がつけられていない。他の人々の命名法では、全ての綴り字 (hurūf-i tahaḡḡi) は印付きと言われる。なぜなら、点によって曖昧さが除かれているからである」 [IAF: 262]。(N)

22 以下に列挙される「文字」が、今日の言語史・文字史の研究において認知されている歴史上の文字系ないし書体のいずれにあたるのかを比定するための十分な証拠はない。例えば「ヒンド文字」は南アジアで通用した何らかのインド系文字を指している可能性が高いが、それを例えばデーヴァナーガリー文字と断定できる根拠はどこにもない。また「ユーナーン文字」を言語史上のギリシア文字に特定する根拠もないし、これが後出する「ルーム文字」とどのように違うのかについても不明である。それゆえ、以降の注釈における文字・書体の解説は、名称の素朴な引き当てという仮定に立ったものと理解していただきたい。(M)

23 現在マアキリーと呼ばれている文字は、クーフィー書体の一種で、Square Kuficとも言われる。主に碑文や装飾タイルに用いられる。ティムール朝やサファヴィー朝の建築にも良く見られる [Waley et al. (EIs) : Calligraphy]。(N)

24 ブラーフミー文字の支派であるスィッドマートリカー文字から派生したシャーラー文字を指すか [田中 1981: 204-206]。(N)

25 南アラビア系文字から派生したエチオピア文字 (ゲーズ文字) を指すか。ゲーズ文字の最古の碑文は紀元後350年頃のものである [内記 1981: 175-177]。(N)

26 アラビア文字のライハーニー書体を指すか。(N)

27 中世ペルシア語で用いられていたパフラヴィー文字を指すか。(N)

文字 (Himyarī)²⁸、ベルベル文字 (Barbarī)²⁹、アンダルス文字 (Andalusī)³⁰、ルーハーニー文字 (Rūhānī) や、古い書物が説明している他の文字など³¹。ある者たちは、ヘブライ文字の獲得を7000のアダム³²に、また別の集団はイドリース³³に関係付けている。イドリースはマアキリー文字を完成させたと言う者たちも

28 紀元後1世紀から6世紀にアラビア半島南部で活動していたヒムヤル族にちなむ文字名か。現在ヒムヤル文字と呼ばれている文字の碑文には、紀元前7世紀頃から紀元後6世紀頃までのものがある [Mordtmann, J. H. (EI) Himyar]。 (N)

29 リビアや北アフリカにおいて、ベルベル系の人々がイスラム以前からの碑文で用いていた文字のいずれかを指すか。主なものにティフナグ (Tifnağ) 文字がある [Camps, G. et al. (EI2) Libiyā]。 (N)

30 アラビア文字のアンダルス書体を指すか。 (N)

31 この周辺では、ヘブライ文字やアラビア文字といった文字系と、クーフィーなどの書体が区別されずに羅列されている。サファヴィー朝に仕えた書家 Qaḍī Aḥmad によって16世紀末に書かれたGHには、'Arabī, Himyarī, Yūnānī, Fārsī, Suryānī, Tibrānī, Rūmī, Qibṭī, Barbarī, Andalusī, Hindī, Šinī の12種類説と、そこに Tamūdī, Ḥağarī, Rūmī-maqlūb, Kūrī, Ma'qilī, Ġafarī, Gurḡī の7種類を加える説が記されている [GH: 12; GH (Etr.) : 53]。 (N)

IAFの「アルバム序文」が列挙しているのは次のとおり：ヒンド文字、シリア文字、ユーナーン文字、ヘブライ文字、コプト文字、マアキリー文字、クーフィー文字、カシュミール文字、ハバシュ文字、ライハーニー文字、ルーハーニー文字、その他 [IAF: 263]。以上のごとく、本文にあるアラビア文字、ペルシア文字、ルーム文字、ヒムヤル文字、ベルベル文字、アンダルス文字を列挙の中に含めていないことになる。 (M)

32 Ādam haft-hazāri. Blochmannによると、この呼び名には、Ādamが死んだ時の人口が7000人であることにちなむという説や、Ādamが7000年前に創造されたことに由来するという説があるという。Bad'ā'unī も、Ādamが7000年前に創造されたとしている [AA (Etr.) : I, 105, n. 2; MT: II, 337]。Ādamとヘブライ文字を関連させる説がどのような典拠によるものかは特定できていない。 (N)

DDM (サファヴィー朝王子 Bahrām Mīrzā のために書かれた) は、最初に文字を書いたのは Ādam であり、Idris がそれに続いたというが、どのようにして書字が行われたかは不明であり、せいぜい知られているのは、「シリア語」と「ヘブライ語」の語句が話されていたということのみだと伝える [DDM: 262]。これに対して GH は、Ādam がアラビア文字を書いた最初の人間であり、その後に Ādam の子 Šit がヘブライ文字を知ったという説を紹介する一方、文字を知ったのは Idris であるという説、Ṭahmūrāt Diwband が書字を創始したという説があることを伝えている [DDM: 262; GH: 12; GH (Etr.) : 52]。 (M)

33 Idrīs. クルアーンに2回登場し、預言者の一人とされている人物。多くの場合、聖書の Enoch に、また時に Elijah (Ilyās) あるいは永遠の命を持つ Ḥidr に比定される [Vajda (EI2) : Idrīs]。彼とヘブライ文字やマアキリー文字を関連させる説がどのような典拠によるものかは特定できていない。なお、DDM は、Ādam に次いで文字を書いた人間を Idrīs とする [DDM: 262]。また GH は、文字を書くことを考案した最初の人間が Idrīs であるという説があることを伝えている [GH: 12; GH (Etr.) : 52]。 (N)

いる。また、クーフィー文字は、信徒の長アリーがマアキリー文字から作ったのだと言う者たちもいる³⁴。諸々の文字の差異は、直線 (saṭḥ) と曲線 (dawr) に由来する。クーフィー文字は1ダーング³⁵が曲線で残りは直線であり、マアキリー文字は全て直線であるというように。古い建物に書かれた文字は、多くの場合この文字で残されている。黒い部分と白い部分を入念に区別し、読む際に混乱が生じないのがよりよいものである³⁶。

今日、イランやトゥーラーン、ルーム、ヒンドでは、8種類の文字が通用している³⁷。それぞれの集団がそのどれか一つを使っている。そのうち6種類すなわちスルス、タウキーウ、ムハッカク、ナスフ、ライハーン、リカーウは、イ

34 DDMは、Ya'rub b. Qaṭṭānがクーフィー文字を発案し、'Alīが完成させたという説を伝えている [DDM: 262]。(N)

35 dāngは全体の6分の1を意味する。重さ、長さなどに用いられる。「クーフィー文字は1ダーングが曲線で残りは直線である」という説明はQKhにも見える [QKh: 298]。(N)

36 IAFの「アルバム序文」はこの部分を以下のごとく記す。「最も良いマアキリー文字とは、黒のところと白のところの案配 (marātib) がいずれも、その黒と白によって字の黒い部分を読む人に混乱を生じさせないような特別のやり方で区別されているようなものである」 [IAF: 263]。(M)

37 以下のような、書体の発展とそれぞれの書体で知られた書家の列举によるアラビア文字書道史の叙述は、16世紀以降にペルシア語で記された書道関連の作品の多くに見られる。しかし、それらの作品の書家リストの間には、書体が説明される順番、それぞれの書体の説明に割かれる分量の配分、挙げられる書家の名前において違いが見られる。イブン・ムクラに由来する六書体>タアリーク書体>ナスタアリーク書体という順番については、AAとMKh、DDM、GHに共通している。一方、DQMは六書体>ナスタアリーク>タアリークという順番をとり、QKhにはタアリークの書家リストは見られない。AAと同様の配置をする作品でも、MKhは六書体に比重が置かれており、DDMは六書体の末尾にタアリークを付して一節にまとめている [DDM: 263-266; DQM: 281-282; MKh: 93-94; QKh: 306-319]。挙げられている書家に関しては、AAの六書体とナスタアリークの部分はQKhと共通点が多い。両書が挙げている Yāqūt Musta'ṣimīの6名の弟子は完全に一致し、また、AAの六書体の部分で言及されている書家のうち、Mawlānā Muḥyī ShīrāzīとMawlānā Shāh Maṣḥadīの2名を除くすべてが、QKhの最終章第1部 (六書体の書家) にほぼ同じ順番で挙げられている。ナスタアリークの書家リストに関しては、AAとQKhはともにMawlānā Sulṭān 'Alī Maṣḥadīの高名な弟子を6名とし、さらにAAのリストのうちMawlānā 'Abd al-Raḥīm Ḥwārizmīまでの書家については、Mawlānā Sulṭān 'Alī Qā'inī、Mawlānā Sulṭān 'Alī Maṣḥadī、Mawlānā Ḥiḡrānīの3名を除くすべてをQKhに挙げられている書家に引き当てることができる。書家リストに関しては、AAとQKhの関係は極めて深いと言える。(N)

ブン・ムクラ³⁸が太陰暦310年【西暦922/3年】にマアキリー文字とクーフィー文字から編み出した³⁹。それにグバル⁴⁰を加えて、7種類の文字が彼によるとする人々や、ナスフがヤークート・ムスタアスイミー⁴¹によるとする人々もいる。スルスとナスフは、曲線が3分の1、直線が3分の2を占める。前者の名前は大字 (ğali) で、後者の名前は小字 (ħafi) である⁴²。タウキーウとリカーウ

38 Ibn Muqlah, Abū 'Alī Muḥammad b. 'Alī. アラビア文字書道の創始者とも称される書家。アッバース朝の宰相であり、政争によって右手を切断され獄死した。886-940年。GHでは、これらの書体はクーフィー文字から生み出されたとされている。11世紀の文人Abū Ḥayyānが引用しているIbn Muqlahの著作では、文字の形や大きさ、文章を書く際のバランスなどの理論化・体系化が論じられている。Rampur of the Raza Libraryには、彼の手になると伝えられるクルアーンの写本が所蔵されている [Blair 2006: 157-160; Waley et al. (Els): Calligraphy; Yūsofi (Elr): Calligraphy]。 (N)

Ibn Muqlahに6書体 (sittah) を帰する説はGHにも見え、同書の異本には6書体に、「より大きな筆で」書かれるトゥーマール tūmārおよび「より繊細な筆で」書かれるグバルを加えて8書体を同人が考案したとする説も紹介されている [GH: 16-17; GH (Etr.): 56, n. 135]。 (M)

39 IAFの「アルバム序文」はこの6種類に加え、タアリークとナスタアリークも列挙しているが、その説明は明らかに辻褄が合わない [IAF: 245]。 (M)

DQMは、ヒジュラ暦310 (922/3) 年にIbn Muqlahがクーフィー文字からこれらの書体を考案したとしている [DQM: 281]。 (N)

40 「塵芥」を意味する ġubār の語によって呼ばれた極小書体については、Timūrのために書家'Umar Aqṭa'がこの書体を用いて作成したコーラン写本についてGHが伝えている。それによると、その写本は印章付き指輪のソケットの下に収まるほどの小ささで、これを献じられたTimūrはその存在に気づかぬほどであったという [GH: 25; GH (Etr.): 64]。なおIbn Muqlahに7書体を帰する説の類例は今のところ見いだせないが、ティムール朝時代の書家Mawlānā Simī Nišāpūriがġubārを加えた7書体を駆使したことについては [GH: 58; GH (Etr.): 125, n. 408]。 (M)

41 Yāqūt Musta'şimī. 本名はYāqūt Ġamāl al-Dīnであり、アッバース朝最後のカリフ、Musta'şim (在位1242-1258年) の奴隷であったためこのように呼ばれる。おそらくアナトリアのAmasyahに生まれ、幼い頃にBaġdādに連れてこられてMusta'şimに仕えた。HuleguによるBaġdād占領後も同地で活動した。1298年没。非常に多作であったことで知られ、アラビア語とペルシア語両方の作例が残されている。 [Blair 2006: 242-249]。 (N)

42 ġaliは大きい、あるいは太い文字、ħafiは小さい、あるいは細い文字を指す。Mīr 'Alī Harawī (注104) 作と伝えられるMKhは、ナスフはスルスの細いもの (bārik) であり、同様にライハーンはムハッカクの、リカーウはタウキーウの細いものであるという表現をしている [MKh: 92]。また、Blairは、本文と同様に、大きい (large) 文字のスルスが小さい (small) 文字のナスフの対 (counterpart) である、また、小さいライハーンと大きいムハッカクが対であるという説明をしているが、その典拠は示されていない [Blair 2006: 167]。なお、al-tuṭṭ al-ğalīl (太字のスルス)、al-tuṭṭ al-ħafīf (細字のスルス) のように、同一書体の中での差異を示すのに用いられる場合もある [Waley et

は、曲線が4分の3で、残りが直線である。上と同じやり方で、それら2つも大字および小字と名付けられる。ムハッカクとライハーンは4分の3が直線である⁴³。同様にこれら2つも【それぞれ大字、小字と】名付けられる。イブン・パウワブの名前で知られるアリー・ブン・ヒラル⁴⁴は6つをいずれも上手く書き、ヤークートが完成させた。彼の6人の弟子たちが高名になった⁴⁵。世間ではシャイフザーダ・スフラワルディーの呼び名で知られるシャイフ・アフマド⁴⁶、

al. (EIs) : Calligraphy; Yūsufi (Elr) : Calligraphy; AA (Etr.) : I, 106]。 (N)

IAFの「アルバム序文」はḡaliとḥafiについて本文よりも直接に、「スルスとナスフについては、曲線が3分の1、直線が3分の2である。ジャリーの方がスルスと呼ばれ、ハフィーの方がナスフと呼ばれる」[IAF: 263-264]と説明している。タウキークとリカーウ、ムハッカクとライハーンの組み合わせについても同様である。(M)

- 43 QKhにおける各書体の曲線の割合の説明は、スルスとナスフ、タウキークとリカーウについては本文の割合と同様だが、ムハッカクとライハーンについては、半分が曲線、半分が直線とされている [QKh: 300]。 (N)

- 44 'Alī b. Hilāl. ブワイフ朝時代の書家。Baḡdādのブワイフ朝宮廷の門番の息子であったため、Ibn Bawwāb (門番の息子) と呼ばれる。ペンやインクの改良も行った。1022年没。Blairは、アラビア文字の書体における曲線の使用は彼によって確立されたとしている。作例としては、Chester Beatty Library所蔵のクルアーン写本や、ジャーヒリーヤ時代の詩人Salama b. Jandalの作品と解説を複数の書体を用いて筆写したTopkapi Palace Musium Library所蔵写本が有名である [Blair 2006: 160-178; Waley et al. (EIs) : Calligraphy; Yūsufi (Elr) : Calligraphy]。 (N)

- 45 Yāqūt Musta'simīの傑出した弟子として6人を挙げることに自体、歴史のなかでしだいに成立した歴史認識であることについてはBlairが論じている [Blair 2003]。16世紀Īrānで成立したGHも6名を挙げるが、本書が挙げる6名のうち、Mīr Yaḥyāのかわりに、Naṣr Allāh Ṭabībを挙げている [GH: 21-22; GH (Etr.) : 60 ff.]。 (M)

DQMはGHと同様の6名を挙げる [DQM: 281-282]。また、16世紀後半に書かれた、Tabrizとその周辺の著名人の墓案内であるRJは、Yāqūt Musta'simīの6名の弟子として、GHと同様にṢayḥzādah Aḥmad, Ḥwāḡah Argūn Kāmili, Mubārak-Šāh b. 'Abd Allāh Zarrīn-qalam, Mawlānā Naṣr Allāh Ṭabīb, Sayyid Ḥaydar Gundah-nawīs, Mawlānā Yūsuf Maṣḥadiを挙げている [RJ: I, 270]。一方、QKhでは、本書と同じくṢayḥ Aḥmad (Muḥammad), Argūn Kāmili, Mawlānā Yūsuf Maṣḥadi, Mawlānā Mubārak-Šāh Zarrīn-qalam, Sayyid Ḥaydar Gundah-nawīs, Pir Yaḥyā Šufīの6名が挙げられている [QKh: 308]。 (N)

- 46 Ṣayḥ Aḥmad. イルハン朝期のBaḡdādで活動した文人、音楽家。スフラワルディー派のŠihāb al-Dīn 'Umar Suhrawardīの子孫。Semsarは、彼はYāqūt Musta'simīの師匠の2人から書道を学んだとする。彼をYāqūt Musta'simīの弟子とする説は、ティムール朝以降のペルシア語の伝記に見られるものである。作例についてはBlair 2006を参照 [Blair 2006: 249-251; Semsar (EIs) : Aḥmad al-Suhrawardī]。 (N)

Ṣayḥzādah-i SuhrawardīがYāqūt Musta'simīの弟子であるとの所伝はGHにもある [GH: 21; GH (Etr.) : 60]。 (M)

アルダン・カーミリー⁴⁷、マウラーナー・ユースフ・シャー・マシュハディー⁴⁸、
マウラーナー・ムバーラク・シャー・ザッリーナカラム⁴⁹、ハイダル・グンダナ
ウィース⁵⁰、ピール・ヤフヤー・スーフィー⁵¹【である】。

47 本書のテキストは底本もいずれの写本も *Argün Kābuli* とするが、歴史的には *Argün Kāmili* が正しいので、テキストの訳文としては「カーブリー」とあるべきところを「カーミリー」と改めた。QKh、GH にも *Argün Kāmili* とある [GH: 21; GH (Etr.): 60-61; QKh: 308]。 (M)

Argün Kāmili は 14 世紀前半に活動した書家。Blair によると、*Aḥmad al-Suhrawardī* (注 46)、*Naṣr Allāh* (注 53) と共に、*‘Irāq* における *Yāqūt Musta‘īmī* の 3 人の門人 (follower) とされることがある。作例としてはライハーン書体のクルアーン写本複数で知られる [Blair 2006: 293, n. 43, 356, n. 40]。 (N)

48 *Mawlānā Yūsuf Šāh Maṣḥadī*. QKh では *Mawlānā Yūsuf Maṣḥadī* と呼ばれている。Blair によると、*‘Irān* における *Yāqūt Musta‘īmī* の 3 人の門人の一人とされることがある。イルハン朝期の書家。他の 2 人は *Ḥaydar* (注 50) と *Mubārak-Šāh* (注 49) である。 [QKh: 308; Blair 2003: 44-45; Blair 2006: 296, n.63]。 (N)

49 *Mawlānā Mubārak-Šāh Zarrīn-qalam*. *Yāqūt Musta‘īmī* の弟子で、イルハン朝期に活動した *Mubārak-Šāh b. Quṭb* を指すか。QKh でも *Mawlānā Mubārak-Šāh Zarrīn-qalam* (黄金の筆) と呼ばれている [QKh: 308; Blair 2003: 42, 44; Blair 2006: 296, n.63]。 (N)

GH には *Mubārak-Šāh Zarrīn-qalam* とある [GH: 21-22; GH (Etr.): 61]。 (M)

50 *Ḥaydar Gundah-nawīs*. イルハン朝期の書家。作例としては、*Iṣfahān* のジャーミイ・モスクのミフラープの碑文 (ヒジュラ暦 710 (1310) 年の紀年あり) が現存している。*Raṣīd al-Dīn* の息子 *Ġiyāṭ al-Dīn Muḥammad* の書道の師匠であった [GH: 22; GH (Etr.): 61; Blair 2006: 253-255]。なおこの書家の名について IAF の「アルバム序文」は *Sayyid Ḥaydar* とする一方、GH には *Sayyid Ḥaydar Gundah-nawīs* とある。ちなみに *gundah-nawīs* とはこの場合、*ḡali-nawīs* すなわち「大字書き」の意であることは QKh と GH が説明している [IAF: 264; GH: 22; GH (Etr.): 61; QKh: 308; Blair 2006: 254]。 (M)

51 底本は *Mīr Yahyā* とするが、Ms. A, Ms. C は *Mīr* ではなく *Pīr* とする [AA Ms. A: 48r; AA Ms. C: 42v]。IAF の「アルバム序文」は *Mīr Yahyā* とするが誤りである [IAF: 264]。また底本およびこれに従う英語訳は、*Yahyā* の語に後続する *Šūfi* を、その後の人名の一部と見なしているが従わない。*Pīr Yahyā Šūfi* という名の書家が書道史のなかで知られていることは以下の通り。 (M)

Pīr Yahyā Šūfi (通称 *Ġamālī Šūfi*) は *Mawlānā Mubārak-Šāh* (注 49) の弟子とされる 14 世紀の書家で、インジュー朝やムザッファル朝に仕えた後、*Šīrāz* に定住した。Blair によると、16 世紀までには、*Yāqūt* が *‘Irāq* と北部 *‘Irān* に 3 人、南部 *‘Irān* に 3 人、合計 6 人の弟子を残したという伝承が成立し、*Pīr Yahyā Šūfi* は南部 *‘Irān* の伝統を引き継いだ第 2 世代と位置付けられるようになったという。DDM は、*‘Irāq* の人々の書道の系統は *Mawlānā Mubārak-Šāh* の弟子 *Pīr Yahyā Šūfi* に遡るとしている [DDM: 264]。なお、サファヴィー朝の *Šāh ‘Abbās* 時代に *Mīr Yahyā* という書家がいるが、ここで意図されている人物ではないだろう [Blair 2003: 44-45; Blair 2006: 286, n.4; Ekhtiari (Elr): *Jamālī Šūfi*; GH: 23; Huart 1908: 87, 92, 246]。 (N)

⁵² サドリ・イラーキーとも呼ばれるナスル・アッラー⁵³、アルクン・アブド・アッラー⁵⁴、ハージャ・アブド・アッラー・サイラフィー⁵⁵、ハーッジー・ムハン

⁵² この段落における、ナスル・アッラーからミール・ファズル・アルハック・カズウィーニまでの書家の一覧を「アルバム序文」は欠く。(M)

⁵³ Naṣr Allāh. QKhでは名がNaṣr Allāh Ṭabīb、称号がṢudūr al-ʿIrāqīで、Pīr Yahyāと(Mubārak-Šāh) Zarrīn-qalamの弟子であったとされている。GHではYāqūtの六人の卓越した弟子の一人とされる[GH: 21; GH (Etr.): 61; Huart 1908: 88, 92; QKh: 308]。(N)

⁵⁴ Arqūn ʿAbd Allāh. QKhによると(Mubārak-Šāh) Zarrīn-qalamの弟子。なお、DDMとGHでは、Arğūn-i KāmīliのバリエーションとしてArğūn b. ʿAbd Allāhという人名が見え、また、HuartはYāqūtの弟子Arğūn-i Kāmīliの名前をʿAbd Allāh Arğūnとする[DDM: 264; GH: 21; Huart 1908: 86; QKh: 308]。Arğūn-i Kāmīli(注47)とArğūn b. ʿAbd Allāhについて、諸史料の間で混乱があったと推察される。(N)

⁵⁵ Ḥwāḡah ʿAbd Allāh Ṣayrafī. QKhによるとṢayḥzādah Suhrawardīの弟子で、イルハン朝Öljeitüの息子で第9代君主のAbū Saʿīd(在位1316-1335年)の書道の師。DQMとSoucekはHaydar Gundah-nawīs(注50)の弟子とする。生涯をTabrizで過ごし、Baghdādの書道の伝統をĪrānに普及させるのに大きな役割を果たした。DDMではSayyid Haydarの弟子とされ、Ḥurāsānの人々の書道の系統は彼に遡るとされている。Blairによると、ʿIrāqと北部Īrānで活動したYāqūtの弟子たちの伝統を受け継ぐ第2世代として、Pīr Yahyā Ṣūfīと対比される。建築物の装飾碑文のデザインで名高い[DDM: 264; DQM: 281; QKh: 308-309; Blair 2003: 44; Blair 2006: 286, n.4; Soucek (Etr.): Abdallāh Ṣayrafī; Waley et al. (Els): Calligraphy]。(N)

同人による筆蹟の現存例については[Bayānī 1363-1364 Sh: 1090-1091; Blair 2006: 257]。なおGHは、同人がYūsuf MaṣḥadīおよびHaydar Gundah-nawīsの二人に師事したと伝える[GH: 22, 24; GH (Etr.): 61, 62]。またṢayrafīが執筆した書道の小論については[Porter 1989]。(M)

マド⁵⁶、マウラーナー・アブド・アッラー・アーシュバズ⁵⁷、マウラーナー・ムフ

56 Hāġġi Muḥammad. QKh は Hwāġah ‘Abd Allāh Ṣayrafi の弟子として、Ṣayḥ Hasan-i Kūček (1343 年没) と同時代に Tabriz で活動した Hāġġi Muḥammad Band-gīr なる人物を挙げる [QKh: 309]。DDM は、彼は ‘Abd Allāh Ṣayrafi の甥であったと伝える [DDM: 264]。DQM は、彼から発する師弟関係を以下のように記す: Hāġġi Muḥammad Band-gīr > Mu‘in al-Dīn Tabrizi > Mawlānā Ṣams al-Dīn Mašriqī Qaṭṭāmi (父) > ‘Abd al-Ḥayy (息子) [DQM: 281]。RJ では以下のような師弟関係も記されている: Hāġġi Muḥammad Band-gīr > Sa‘d al-Dīn Tabrizi > Mawlānā Ṣams al-Dīn Muḥammad Qaṭṭāmi Mašriqī (父) > ‘Abd al-Raḥīm Ḥalwātī (息子) > Ni‘mat Allāh b. Muḥammad al-Bawwāb > Ṣams al-Dīn Muḥammad Ḥaṭṭāt Tabrizi > ‘Alā al-Dīn Muḥammad [RJ: I, 370-371]。(N)

直前に挙げる Hwāġah ‘Abd Allāh Ṣayrafi の弟子として GH が言及する Hāġġi Muḥammad Band-düz Tabrizi にあたるか。この人物は、ヒジュラ暦 788 (1386/7) 年、Timūr のもとに参上し、彼が「エジプトの君主」に送ろうとしていた親書の執筆を命じられたという。ただし GH のこの箇所には、Minorsky が指摘するとおり、テキストに問題があり、確実な判断を許さない [GH: 24-25; GH (Etr.): 63-64, n. 170]。あるいは、後続する Mawlānā ‘Abd Allāh Āš-paz がティムール朝時代に活動したことを考慮すれば、この人物は、同朝君主 Sulṭān Ḥusayn Mirzā に仕えた Mawlānā Hāġġi Muḥammad Naqqāš にあたるかもしれない [HS: IV, 348]。(M)

57 ‘Abd Allāh Ṭabbāḥ と呼ばれる、15 世紀半ばにティムール朝に仕えた書家か。Mawlānā Azhar (注 90) や、Ġa‘far Tabrizi (注 89) の弟子という説がある。QKh には、Mawlānā Ġa‘fari Tabrizi に続き、彼の弟子で、スルスで知られた Tabriz の ‘Abd Allāh Ṭabbāḥ が見える。彼は、DDM や RJ では Farīd al-Dīn Ġa‘far Tabrizi、DQM では Ṣams Ġa‘fari Tabrizi なる書家の弟子とされている。また、RJ は彼のラカブを Šihāb al-Dīn とする [DDM: 264; DQM: 281; GH: 27; GH (Etr.): 66; Huart 1908: 87, 96, 107; QKh: 309, 312; RJ: I, 371; Soucek (Eīr): ‘Abdallāh Heravī]。(N)

GH は ‘Abd Allāh Āš-paz (Ṭabbāḥ) の師について触れないが、TR は本文で後出する Mawlānā Ġa‘far Tabrizi (注 89) だとする [TR: 315]。同人の経歴に関する Soucek の詳細な説明によれば、同人がティムール朝のアトリエで少なくとも 1425 年には活動していたことはたしかであり、現存する写本の奥書のうち最も年代の新しいヒジュラ暦 877-882 (1472-1477) 年という年代を考慮すれば、同人が Sulṭān Ḥusayn Mirzā の治世においてもなお活動していたと考えられる [Soucek (Eīr): ‘Abdallāh Heravī]。このような同人の年代を考慮すると、Porter が指摘した同人の書写になるというヒジュラ暦 944 年の奥書を備えた写本の真正性は疑わしいことになる [Porter 1989: 57, n. 5; Ashraf 1986: 37-38]。Huart は、同人が Hirāt で名を成した後、インドを訪れ、同地の「筆頭宰相」を讀める頌詩をものしたこと、その後 Hirāt に戻り、ヒジュラ暦 885 (1480) 年に 66 歳で死去したとするが、根拠は不明である [Huart 1908: 96]。この書家に関する文献資料の記事および現存する書蹟の例については [Bayānī 1363-1364 Sh.: 360-364] を見よ。(M)

イー・シーラーズイー⁵⁸、ムイーン・アッディーン・タヌーリー⁵⁹、シャムス・アッディーン・ヒターイー⁶⁰、アブド・アッラヒーム・ハルワティ⁶¹、アブド・

58 Mawlānā Muḥyi Širāzi. バヤーニーはこの書家がヒジュラ暦890 (1485/6) 年までは存命であったとしているが、その根拠は不明である。またMAにおいてこの書家が‘Abd Allāh Tabbāḥおよび‘Abd Allāh Šayrafiと並んで言及されているとも説明しているが、管見の限りMAにそのような記事は見られない [Bayāni 1363-1364 Sh.: 895]。(M)

59 Mu‘in al-Dīn Tanūrī. QKhはḤāḡḡī Muḥammad Band-gīrの弟子としてMawlānā Mu‘in al-Dīn Harawīなる人物を挙げる [QKh: 309]。あるいは、DQMにおける、Ḥāḡḡī Muḥammad Band-gīrの弟子Mu‘in al-Dīn Tabriziにあたるかもしれない [DQH: 281]。(N)

前出のḤāḡḡī Muḥammadの弟子としてGHが挙げるMu‘in al-Dīnにあたるかも知れないが、注56で述べたとおり、GHの当該箇所にはテキストの問題があり、確実な判断を許さない。GHはそのMu‘in al-Dīnの事績として、Tabrizの「四ミナレット」の碑文に言及している [GH: 24-25; GH (Etr.): 63-64, n. 170]。(M)

60 Šams al-Dīn Ḥiṭā‘ī. QKhにおいて、‘Abd Allāh Šayrafiの弟子筋であり、彼に匹敵すると伝えられるMawlānā Šams al-Dīn Mašriqī Qaṭṭāmīの誤りか [QKh: 309]。師弟関係から、QKhのŠams al-Dīn Mašriqī Qaṭṭāmīは、DQMにおけるMawlānā Šams al-Dīn Mašriqī Qaṭṭāmī、DDMにおけるŠams al-Dīn Ḥiṭā‘ī、RJにおけるMawlānā Šams al-Dīn Muḥammad Qaṭṭāmī Mašriqīに相当すると考えられる。RJは、Šams al-Dīn Muḥammad Qaṭṭāmī Mašriqīの弟子として、‘Abd al-Raḥīm ḤalwātīとFarīd al-Dīn Ġa‘far Tabriziを挙げる [DDM: 264; DQM: 281; RJ: I, 370-371]。(N)

GHには、前出のMu‘in al-Dīnの弟子として、Mawlānā Šams al-Dīn Mašriqī Qīṭābīが言及されているが、その英語訳は別の底本にもとづきQīṭābīをQaṭṭā‘īとしており、テキスト上の問題が残る。それゆえ、本文のŠams al-Dīn Ḥiṭā‘īとGHのŠams al-Dīnとの関係は定かでない [GH: 25; GH (Etr.): 64]。(M)

61 ‘Abd al-Raḥīm Ḥalwātī. 底本はこの人名の最後の要素をḤLWLȚとし、英語訳はこれを暫定的にḤālūlī (?) としているが、Ms. A. Ms. Cにもとづき、Ḥalwātīと改めた [AA (Etr.): I, 107; AA Ms. A: 48r; AA Ms. C: 42v]。DQM、QKh、RJは、Mawlānā Šams al-Dīn Mašriqī Qaṭṭāmīの2人の息子として、‘Abd al-Ḥayyと‘Abd al-Raḥīm Ḥalwātīの名前を挙げる。‘Abd al-Raḥīm ḤalwātīはMawlānā Ni‘mat Allāh Bawwābの師であったという。RJも同様の師弟関係を記録している [DQM: 281; QKh: 309, 311; RJ: I, 83-84, 370-371]。(N)

GHは、Mawlānā Šams al-Dīnの弟子の一人として‘Abd al-Raḥīmを挙げる。ここでもテキスト上の問題があり、その英語訳は別の底本にもとづいて、この弟子の名を‘Abd al-Raḥīm Ḥalwātīとする。この再建案は、本訳注のテキスト再建に整合的であるが、確実な判断はできない。またGHの別の箇所では、‘Abd al-Raḥīm Ḥalwātīが、本書にも名が挙がるMawlānā Ni‘mat Allāh Bawwāb (注69)の師として言及されている [GH 25, 28; GH (Etr.): 64, 67]。(M)

アルハイイ⁶²、マウラーナー・ジャアファル・タブリーズィー⁶³、マウラーナー・シャール・マシュハディー⁶⁴、マウラーナー・マアルーフ・バグダーディー⁶⁵、マウラーナー・シャムス・アッディーン・バイスングリー⁶⁶、ムイーン・アッディーン

- 62 'Abd al-Ḥayy. 前出の注61の'Abd al-Raḥīm Ḥalwātīの兄弟'Abd al-Ḥayyを指すであろう [DQM: 281; QKh: 309; RJ: I, 83-84, 370-371]。(N)

GHは、Mawlānā Šams al-Dīnの弟子の一人として'Abd al-Ḥaqqに言及するが、その英語訳は別の底本にもとづきこの人物の名を'Abd al-Ḥayyとする。このようなテキスト上の問題があるため、本文の'Abd al-ḤayyがGHに見える人物に同じであるかどうか、判断は下せない。なおGHには、本書にも言及されるMawlānā 'Abd Allāh Āš-paz (Tabbāḥ) (注57)の弟子、かつMawlānā Šayḥ Kamāl Sabzawārīの師として、Mawlānā 'Abd al-Ḥayy Sabzawārīなる書家が言及されているが、この人物についてもテキスト上の問題があり、その英語訳は'Abd al-Ḥayyを'Abd al-Ḥaqqとする [GH: 32, 38; GH (Etr.): 72, 75]。それゆえこの人物についても、本書の'Abd al-Ḥayyとの関係については判断不能である。(M)

- 63 Mawlānā Ġa'far Tabrizī. QKhには、'Abd al-Ḥayyと'Abd al-Raḥīm Ḥalwātī 兄弟に続いて、Mawlā Ġa'farī Tabrizīという人名が見える。DDMは、'Abd Allāh Šayrafiの弟子Muḥammad Band-girの弟子にŠams al-Dīn Ḥiṭābīなる書家がおり、その弟子Farīd al-Dīn Ġa'far Tabrizīはティムール朝のBāysungurの師であったとする。RJでも、Šams al-Dīn Muḥammad Qaṭṭāmī Mašriqīの弟子としてFarīd al-Dīn Ġa'far Tabrizīが見え、さらに彼は'Abd Allāh TabbāḥとMawlānā Aẓharの師匠とされている [DDM: 264; QKh: 309; RJ: I, 370-371]。DDMやRJの情報に依るなら、この人物はナスターリークの書家として知られているĠa'far Tabrizī (注89)と同一人物の可能性がある。(N)

GHでは、'Abd al-Ḥaqq (注68) および'Abd al-Raḥīm (注61) と並び、Mawlānā Šams al-Dīnの弟子の一人として言及される点で、本書とコンテキストが類似している [GH: 25; GH (Etr.): 64]。(M)

- 64 Mawlānā Šāh Mašhādī. 詳細不明。史料にはこの書家に比定できる人物を見いだせず、バヤーニーの網羅的な研究書にも同名の書家について言及はない。(M)

- 65 Mawlānā Ma'rūf Baġdādī. QKhには、Mawlānā Ġa'farī Tabrizīの弟子として、Mawlānā Ma'rūf Baġdādīが見え、Šāh Ruḥ時代に書かれた*Maṭla' al-sa'dayn wa maġma' al-baḥrayn*に拠って、彼が1日で1500バイトを書いたという逸話を伝える。DDMは、彼はPir Yahyā Šūfiの弟子Sa'd al-Dīn 'Irāqīの弟子とする [DDM: 264; QKh: 309-310]。(N)

GHに言及されるMawlānā Ma'rūf Ḥaṭṭāt Baġdādīか。同人はGHによると、Sultān Aḥmad Ġalāyir (在位1382-1410年) 支配下のBaġdādから、Timūrの孫Mirzā Iskandar 支配下のIṣfahānに移った後、君主Šāh Ruḥ (在位1409-1447年) にしたがって移動し、Hirātの書院で活動した [GH: 26-27; GH (Etr.): 64-66]。(M)

- 66 Mawlānā Šams al-Dīn Bāysungurī. QKhには、Mawlānā Ma'rūf Baġdādīの弟子として、Šams al-Šu'arāという号で詩人としても知られたMawlānā Šams al-Dīnが見える [QKh: 310]。一方DDMは、Mawlānā Ma'rūfの弟子であるMawlānā Ḥusām al-Dīnという書家がŠams-i Bāysungurīという称号で知られていたと伝える [DDM: 264]。(N)

GHにも所伝があり、そこでもこの書家が六書体に通じた名人であったとされている。Bāysungurīという帰属表示は、ティムール朝君主Šāh Ruḥの子で、学芸の保護に熱心に取り組み、自身も傑出した書家として知られていたMirzā Bāysungurとの関係に因むものである。この書家は、この王子の保護のもとで活動すると同時に、この王子

ン・ファラーヒー⁶⁷、アブド・アルハック・サブザワリー⁶⁸、マウラーナー・ニウマト・アッラー・バウワブ⁶⁹、料紙への砂子振りや着色を始めたハージャギー・ムーミン・マルワリード⁷⁰、<I, 114>ミールザー・シャー・ルフの息子ス

の書の師でもあったとGHは伝える [GH: 28-29; GH (Etr.): 67-68]。 (M)

67 Mu'in al-Din Farāhī. Sultān Ḥusayn Mirzāに仕えて各種の書体をよくしたMawlānā Mu'in al-Din al-Farāhīのことか [HS: IV, 340]。またQKhは「Ḥurāsānの能書家たち」の一人として、ヒジュラ暦907 (1501/2) 年にHirātで没したMu'in al-Din Farāhīを挙げている [QKh: 310]。 (M)

68 'Abd al-Ḥaqq Sabzawāri. QKhは、Ḥurāsānの書家として、Mu'in al-Din Farāhīと並べてMawlānā 'Abd al-Ḥaqq Sabzawāriの名を挙げる [QKh: 310]。 (N)

前出の注62で述べたごとく、GHにはMawlānā 'Abd al-Ḥayy Sabzawāriなる書家が言及されているが、その名についてはテキスト上の問題があり、その英語訳は'Abd al-Ḥayyを'Abd al-Ḥaqqとする [GH: 32, 38; GH (Etr.): 72, 75]。いずれにせよGHのこの人物は、'Abd Allāh Tabbāḥの弟子であり、Mawlānā Ṣayḥ Kamālの師であるという。GHの著者がMawlānā Ṣayḥ Kamālにヒジュラ暦965 (1557/8) 年、Mašhadで出会っていることは、その師である当の書家の活動年代に関する参考材料である [GH: 32, 38; GH (Etr.): 72, 75]。 (M)

69 Mawlānā Nīmat Allāh Bawwāb. QKhでは、'Abd al-Raḥīm Ḥalwātī (注61)の弟子で、Mawlānā Ṣams al-Din Tānī Tabrizī (DQMにおけるMawlānā Ṣams al-Din Tabrizīに相当するか)の師であるTabrizの書家とされている。[QKh: 311]。DQMは、彼の前後の師弟関係を以下のように記す: Mawlānā Ṣams Ga'fārī Tabrizī > 'Abd al-Raḥīm Ḥalwātī > Nīmat Allāh Bawwāb > Mawlānā Ṣams al-Din Tabrizī [DQM: 281]。RJに記録されている師弟関係については注56を参照 [RJ: I, 370-371]。 (N)

GHに言及される同名の書家のことであろう。GHによれば、'Abd al-Raḥīm Ḥalwātī (注61)の弟子である一方、六書体を良くしたMawlānā Ṣams al-Dinなる書家 (注60、注66のいずれのṢams al-Dinとも別人)の師でもあり、Ġahān Šāh (在位1439-1467年)がTabrizに造営した数々の建造物 (imārāt)の碑文はすべて同人の筆になるとGHは伝える [GH: 28; GH (Etr.): 67; Miller (EIs)]。 (M)

70 Ḥwāḡagī Mu'min Marwārid. QKhには、Ḥwāḡagī Marwāridとして知られ、六書体に加えナスタアリークにも秀でていたMuḥammad Mu'minというḤurāsānの書家が見える。彼は、晩年にインドへ移住したという。ただし、この部分のQKhのテキストは混乱している可能性があり、Muḥammad Mu'minの没年がヒジュラ暦950 (1543/4) 年頃とされる一方で、著者は同953 (1546/7) 年に自らが執筆した書家伝を彼に見せたとしている。また、QKhはMuḥammad Mu'minの息子Ḥwāḡah Šihāb al-Din 'Abd Allāhが紙への彩色を発案したとするが、下記の通り、ティムール朝期やサファヴィー朝期の他の史料においては、Šihāb al-Din 'Abd AllāhはMuḥammad Mu'minの父の名とされている [QKh: 310-311]。 (N)

TSに言及されるḤwāḡah Muḥammad Mu'minのことである。同人の名の一部であるMarwārid、父Ḥwāḡah 'Abd Allāh Marwāridに因むものであるから、本書に挙げる同人の名は、正しくはḤwāḡagī Mu'min-i Marwāridとエザーフエを付して読むべきである。同人は書に秀で、とくにナスフ体とスルス体にかけては「第二のヤーカート」と呼ばれるほどであったという。同人は、TSの著者たるサファヴィー朝の王子Sām Mirzāの師でもあり、サドル職も務めたが、のちにインドに向かいヒジュラ暦948 (1551/2) 年

ルターン・イブラーヒーム⁷¹、マウラーナー・ムハンマド・ハキーム・ハーフィズ⁷²、マウラーナー・マフムード・スィヤーウシュ⁷³、マウラーナー・ジャマル・アッディーン・フサイン⁷⁴、マウラーナー・ピール・ムハンマド⁷⁵、ミール・ファズル・アルハック・カズウィーニー⁷⁶もまた、これら6種類の文字のいずれにおいても驚くべき腕前を持っていた。

に同地で没したという [TS: 107]。ただし、料紙への色粉装飾や彩色の技法を同人に帰する説の出所は不明であるし、それらの技法の始まりを16世紀前半の人物に帰する説も書道史、美術史の知見に反する [Blair 2006: 50-52]。なおその父 Ḥwāḡah ‘Abd Allāh Marwārid はティムール朝君主 Sulṭān Ḥusayn Mirzā 時代に ‘Alī Šīr Nawāī の保護のもと活動した文人にして書家たる Ḥwāḡah Šihāb al-Dīn ‘Abd Allāh al-Bayānī Marwārid のことである [久保 1990: 40]。(M)

- 71 Sulṭān Ibrāhīm b. Mirzā Šāh Ruḡ. ティムール朝の Šāh Ruḡ の息子。父のもとで Fārs 総督を務めた。スルスに秀でた書家として GH にも名前が挙げられている。QKh は、彼による碑文が Šīrāz に残されていると伝える [GH: 24; GH (Etr.): 63; QKh: 311; Manz (EI2): Šāh Ruḡh]。(N)

自らの書院を構えて、画家・書家を保護したことで知られるこのティムール朝の王子は、自ら書家としても名を残した。同人がナスフ体によって書写したコーラン写本 (1427年製作) がムガル帝国の書院に渡り、現在、メトロポリタン美術館に所蔵されている (no. 13.228.1) [Seyller 1997: 340]。(M)

- 72 Mawlānā Muḥammad Ḥakīm Ḥafīz. Mawlānā Muḥammad Ḥakīm Ḥafīz. QKh には、Šāh Ruḡ と同時代の Yazd の書家として Mawlānā Muḥammad Ḥakīm Ḥafīz が見える [QKh: 311]。(N)

KhA の書家列伝には、Ḥwāḡah Muḥammad Ḥafīz なる「書家たちの筆頭」(sar-āmad) が「六書体のいずれをも」完全に書くとの所伝がある [KhA: 238]。(M)

- 73 Mawlānā Maḥmūd Siyāwuš. QKh では、スルスとナスフに秀でた Šīrāz の書家として Mawlānā Maḥmūd Siyāwuš が見える [QKh: 311]。(N)

GH においては、後出する Mawlānā Pir Muḥammad Ṭānī とともに Šīrāz 出身の書家として言及されており、同地のモスクやマドラサにある碑文は両名の筆になるという [GH: 28; GH (Etr.): 67]。(M)

- 74 Mawlānā Ġamāl al-Dīn Ḥusayn. QKh において、Mawlānā Maḥmūd Siyāwuš の次に、QKh 執筆時に存命中の Šīrāz の書家として挙げられている Mawlānā Ġalāl al-Dīn Ḥusayn Muḥṭār にあたるか [QKh: 312]。(N)

- 75 Mawlānā Pir Muḥammad. QKh には、次注の Mīr Faḍl al-Ḥaqq Qazwīnī の師匠筋の人物として、Šīrāz の書家 Mawlānā Pir Muḥammad がみえる [QKh: 311]。(N)

GH においては、Mawlānā Pir Muḥammad と Mawlānā Pir Muḥammad Ṭānī 「二世」の二人が言及されているが、本書の人物がいずれにあたるのか、定かではない [GH: 28; GH (Etr.): 67]。(M)

- 76 Mīr Faḍl al-Ḥaqq Qazwīnī. QKh には、Mawlānā Pir Muḥammad の弟子で、タアリークで知られた Šīrāz の書家 Mīr Faḍl al-Ḥaqq Ḥusaynī Sayfī Qazwīnī が見える。ヒジュラ暦 901 (1495/6) 年に没したとされる [QKh: 311]。(N)

7番目はタアリークであり、リカーウとタウキーウから編み出された。直線はたいへん少ない。6種類の文字において良い腕前を持っていたハージャ・タージ・サルマーニー⁷⁷が賞賛すべきものに引き上げたが、彼の発明であるとする者たちもいる。最近の人々の中では、スルターン・アブー・サイード・ミールザーの書記 (munši) であったマウラーナー・アブド・アルハイイ⁷⁸がこの文字を非常に上手く書いた。マウラーナー・ダルウィーシュ⁷⁹、アミール・マンスー

77 Hwāḡah Taḡ Salmāni. MKh, DDM, DQM, GHはタアリーク体の考案者として Hwāḡah Taḡ Salmāniに言及している [MKh: 93; DDM: 265; DQM: 282; GH: 42; GH (Etr.): 84]。 (N)

78 Mawlānā ‘Abd al-Ḥayy. 底本ではMawlānā ‘Abd al-Ḥayyの後にwāwが入っているが、B写本、C写本に従い、wāwを除いて訳した [AA Ms. A: 48r; AA Ms. B: 53v; AA Ms. C: 42v]。Mawlānā ‘Abd al-Ḥayyは、サファヴィー朝史料においてシェキャスタ・タアリークを完成させたとされる15世紀の書家で、ティムール朝君主 Sulṭān Abū Sa‘id Mirzā (在位1451-1469年)に仕えたHwāḡah ‘Abd al-Ḥayy Munši Astarābādiを指すと考えられる。MKh, DDM, DQM, GHでは (Hwāḡah) ‘Abd al-Ḥayy (Munši) とされ、Taḡ Salmāniに続いてタアリーク書体を完成させた人物と位置付けられている [Blair 2006: 273; DDM: 265; DQM: 282; GH: 42-43; GH (Etr.): 84-85; Huart 1908: 105, 213, 317; MKh: 94; Yūsofi (Etr.): Calligraphy]。 (N)

79 Mawlānā Darwīš. DDMは、Mawlānā ‘Abd al-Ḥayyの弟子としてDarwīš ‘Abd Allāhという書家を挙げる。GHには、Mawlānā ‘Abd al-Ḥayy (注78)の弟子であり、師を超えたという評価もあるとされるMawlānā Darwīš ‘Abd Allāhという書家が見える。Sulṭān Abū Sa‘id MirzāやSulṭān Ḥusayn Bāyqarā (在位1469-1506年)の子供たちに仕えたという。TAAの書家列伝には、Šāh Ṭahmāsp時代の書家たちが做った書家としてMawlānā Darwīšの名が見える。Blochmannによると、‘Alī Šīr Nawā‘īの友人であり、後にサファヴィー朝に仕えたという [AA (Etr.): I, 107, n. 6; DDM: 265; GH: 44-45; GH (Etr.): 85-86; TAA: 172, 173; Blair 2006: 307-308, n. 139]。 (N)

‘Alī Šīrの書院で活動したナスターリークの書家の一人として、Mawlānā Darwīš Muḥammad Bāḡ-i Šahriがいる [久保 1990: 41]。なおTirmiziはヒジュラ暦976 (1568/9)年に作成されたAḡmēr所在の碑文二点の筆耕者として名を残すDarwīš Muḥammadと同一人物である可能性を指摘する [Tirmizi 1961: 45-47]。同じ名前の書家はヒジュラ暦972 (1564/5)年作成のNāḡawr所在の碑文にも見える [Chaghtai 1954: 39-40]。しかしこの同定案を支える証拠は無いし、本文のこの箇所前後ではAkbar時代に先行する時代の書家たちが言及されていることを考慮すると、ここにAkbar時代のDarwīš Muḥammadが配置されることは不自然である。また「アルバム序文」はタアリーク書体に関しては、Mawlānā DarwīšがMawlānā ‘Abd al-Ḥayyを越えていたと、本書には見られない評価を示している [IAF: 264]。 (M)

ル⁸⁰、マウラーナー・イブラーヒーム・アスタラーバーディー⁸¹、ハージャ・イフティヤール⁸²、ムンシー・ジャマール・アッディーン⁸³、ムハンマド・カズウィーニー⁸⁴、マウラーナー・イドリース⁸⁵、ハージャ・ムハンマド・フサイン・ムンシー⁸⁶もまた、卓越していた。そして、世界の主人たる御方のミール・ムンシーであるアシュラフ・ハーン⁸⁷が高い水準に至らしめた。

- 80 Amīr Maṣṣūr. GHには、Astarābād出身で、Mawlānā Darwīšの流れを汲む書家Mir Maṣṣūrの名前が見える。その息子Amīr QāsimはĪrānでHumāyūnの配下に加わりインドに移住し、Humāyūn死後はAkbarに仕えたという。このMir Maṣṣūrは、TAAにみえる、Šāh Ṭahmāspのムンシーであり、Mawlānā Darwīšの流れを汲むタアリークで知られた書家Ḥwāḡah ‘Alā al-Dīn Maṣṣūr Munšīと同一人物の可能性ある [GH: 48-49; GH (Etr.): 89; TAA: 172, 173]。 (N)
- 81 Mawlānā Ibrāhīm Astarābādī. GHのタアリークの章において、Ḥwāḡah ‘Abd al-Ḥayy (注78)とMawlānā Darwīš (注79)に次ぐ3番目の名手とも評価されている、Astarābād出身のMawlānā Ibrāhīmであろう。彼はImām Raḍā廟に仕え、またQumにも滞在していた。 [GH: 47; GH (Etr.): 89]。 (N)
- 82 Ḥwāḡah Iḥtiyār. タアリークで知られた書家。GHによると、Hirātでサファヴィー朝のMuḥammad Ḥudābandah (在位1579-1588年)に即位前から30年間書記として仕えた。TAAのŠāh Sulṭān Muḥammad (Ḥudābandah) 時代の記述には、Ḥwāḡah Iḥtiyār Munšīの名前が見える。BlochmannはSulṭān Ḥusayn Bāyqarāに書記として仕えたとするが、その典拠は不明である [GH: 49; GH (Etr.): 91; TAA: 283; Thackston (Elr): Ektīār; AA (Etr.): I, 107, n. 7]。 (N)
- 83 Munšī Ġamāl al-Dīn. 詳細不明。同時代史料にはこの書家に比定できる人物を見いだせず、バヤーニーの網羅的な研究書にも言及はない。 (M)
- 84 Muḥammad Qazwīnī. TAAには、Šāh Ṭahmāsp時代に知られた書家としてMawlānā Muḥammad Amīn Munšī Qazwīnīの名が見える [TAA: 173]。 (N)
- 85 Mawlānā Idrīs. DQMやGHでは、タアリークで知られた書家として、アクコニルに仕えたMawlānā Idrīsが挙げられている [Blair 2006: 307-308, n. 139; DQM: 282; GH: 44; GH (Etr.): 85]。 (N)
- 86 Ḥwāḡah Muḥammad Ḥusayn Munšī. TAAやGHでタアリークの名手として名前が挙げられているMirzā Muḥammad Ḥusaynか。Muḥammad Ḥusaynの父Šukr AllāhはŠāh Ṭahmāspの下でmustawfi-yi mamālikを務めた。TAAは、彼がŠāh ‘Abbās時代にインドに移住し、「インドの支配者 (farmān-rawā-yi Hindūstān)」にムンシーとして仕えていと伝えている [TAA: 172-173; GH: 54; GH (Etr.): 99]。 (N)
- 87 Ašraf Ḥān. 名はMuḥammad Ašgar。本書は別の箇所でも同人にSabzawārīという帰属表示を付する一方、Badā‘uniは同人をMašhad出身とする [AA: I, 224; MT: III, 181]。同人がサイドであったことについては諸記録が一致するが、Ḥusaynīとするもの [NM: 19v; MT: III, 181]と‘Arab-šāhiとするもの [TA: II, 153-154, 432; DhKh: 211]とに所伝は分かれる。同人が七書体に通じていたことは上記の所伝に記されるとおりだが、各種の書体の中でも特にタアリーク体に秀でていたことはHIが証言している [HI: II, 208]。同人の経歴は、Humāyūnのインド再征服 (1555年)に参軍した人士の一人として言及される以前の動向は不明である [AN: I, 342]。しかし1565/6年に成立したNMは、同人が

8番目の文字はナスタアリークで、これは全て曲線できている。サーヒブ・キラーンの時代に、ハージャ・ミール・アリー・タブリーズィー⁸⁸がナスフとタアリークから編み出した。しかしこれは信じられない。なぜなら、サーヒブ・キラーン陛下の時代より前にナスタアリークで書かれた書物が見られたからである。彼の弟子のうちの2人、マウラーナー・ジャアファル・タブリーズィー⁸⁹

「30年にわたり」帝国に仕えていと述べており、これを信じるならHumāyūnのインド失陥前から奉職していた旧臣だったことになる [NM: 19v]。なお1989年にサザビーズの売り立てにかかり、現在個人蔵のコーラン写本は、Seyllerの報告によると、「Mir Munšiとして知られるMuhammad Aşgar b. Maṣṣūr」がヒジュラ暦966 (1559) 年に書写したものであるという (Seyllerはヒジュラ暦の暦年を996と記しているが、おそらく単純な誤植であろう) [Seyller 1997: 342]。この奥書によって、この人物の父親の名も知れる。なおSeyllerはこの写本の作成地を、Buḥārāと推定しているが、書写の年代を信じる限り、上記のような同人の経歴には整合しない推定である。同人の地位と職能は「ミール・ムンシー」mir munši (「書記長」という称号・職名に示されているが、彼はHumāyūnの時代から引き続いてその地位にあった [THA: 231; TA: II, 153]。一方Aşraf Ḥānの称号を得たのは1561年のことである [THA: 228; TA: II, 153-154; AN: II, 144]。彼はベンガル地方における戦役の中で1575年に戦死したので、同人の没年をヒジュラ暦973 (1565/6) 年とするMUとこれに従った英語訳注は誤りである [AN: III, 160; MU: I, 74; AA (Etr.): I, 107, n. 8]。なお「アルバム序文」はAmir Maṣṣūr (注79) とそれに後続するḤwāḡah Muḥammad Ḥusayn (注86) までの列举を欠いている。Aşraf Ḥānについては「王中の王たる陛下のムンシーたちのうち、Aşraf Ḥānに並ぶほどに書ける者はいなかった」と、本書AAよりも踏み込んだ評価を与えている。一方、「アルバム序文」はそのAşraf Ḥānの記事の後に、同書体の発展に寄与した書家たちの名を挙げているが、その顔ぶれは本書のそれと異なっている (本書に名が挙がる書家には下線を付した)。「Ḥwāḡah 'Abd Allāh Sayrafī, Mawlānā Muḥyī al-Dīn Šīrāzī, Mullā 'Abd Allāh Aš-paz Harawī, Ḥāfīz Ḥafīz, Mawlānā Abā Bakr, Mawlānā Šayḥ Maḥmūd, Ḥwāḡah 'Abd Allāh Marwāridがこの七つの書体を最高の段階へと押し上げた」[IAF: 264]。(M)

⁸⁸ Ḥwāḡah Mir 'Alī Tabrizī. ナスタアリークを編み出した、あるいは完成させたことされる、Timūrと同時代の書家。ナスタアリークに関しては、Ġa'far b. 'Alī Tabrizīがナスフに基づいて編み出したという説も見られる。MKh, DDM, QKh, GHは、Mir 'Alī Tabrizīがナスタアリークを編み出したとする。また、DDMは彼のラクブをZahir al-Dīnとする。Wrightは、ナスタアリークの原型となる書体は14世紀以降のŠīrāzやTabrizで見られ、徐々に発展したと論じている [Blair 2006: 274-279; DDM: 265; GH: 57; GH (Etr.): 100; Huart 1908: 94, 99, 107, 207; MKh: 94; QKh: 312; Soucek (EIr): Mir 'Alī Tabrizī; Waley et al. (EIs): Calligraphy; Wright 2003; Yūsofi (EIr): Calligraphy]。(N)

⁸⁹ Mawlānā Ġa'far Tabrizī. Tabrizに生まれ、Hirātでティムール朝のBāysungurに仕えた。そのため、Ġa'far al-Bāysunguriとも呼ばれる [Blair 2006: 279]。QKhは、彼をMir 'Alī Tabrizīの弟子とする。DDM, DQM, GHでは、ナスタアリークを編み出したMir 'Alī Tabrizīの息子にして弟子の'Abd Allāh (BlairとRettigによると'Ubayd Allāh)の弟子とされている。また、DDMとRJは彼のラクブをFarid al-Dīnとする。40人の書記を擁する写本工房の長であり、多くの作品が残されている。Rettigはベルリン州立図

とマウラーナー・アズハル⁹⁰がこの技をさらに進歩させた。この文字の達人として、書記の技芸において並ぶ者のないマウラーナー・ムハンマド・アウバヒー⁹¹と、マウラーナー・ヤーリー・ハラウィー⁹²がいる。全ての者の中でも卓越しているのは、マウラーナー・スルターン・アリー・マシユハディー⁹³である。マウ

書館所蔵の *Diez Album* に収録されている彼の作品を分析し、Mir 'Ali Tabrizi と Ğa'far Tabrizi のナスタアリックのスタイルの違いを指摘した上で、後者がナスタアリックの規範となった過程を論じている。彼と Mawlānā Aẓhar の関係については次注も参照されたい。Rettig は、彼の没年を 1435-1440 年頃と推察している。なお、六書体の部分で既出の Ğa'far Tabrizi と同一人物である可能性がある (注 63) [DDM: 265; DQM: 281; GH: 57; GH (Etr.): 100; QKh: 312; RJ: I, 371; Blair 2006: 275, 300-301, n.95, n. 100; Rettig 2017: 197-205]。 (N)

- ⁹⁰ Mawlānā Aẓhar. QKh は、彼を Ğa'far Tabrizi の弟子であり、Mawlānā Sulṭān 'Alī-yi Mašhādī (注 93) の師とする。RJ では、彼の師の名前は Farid al-Dīn Ğa'far Tabrizi とされる。GH では、Mawlānā Aẓhar はナスタアリックの項目の冒頭で Ğa'far b. 'Alī Tabrizi に続いて挙げられており、'Abd al-Raḥmān Ḥwārazmī とともに「異なった様式 (rawiṣ-i digar)」でナスタアリックを書いたとされる [GH: 57; GH (Etr.): 100; QKh: 312; RJ: I, 371]。現在の主要な研究では、Mawlānā Aẓhar は Ğa'far b. 'Alī Tabrizi の弟子とされている。Hirāt で Bāysungur に仕え、彼の死後は一時 Mašhad や Samarqand に滞在し、その後 Abū Sa'īd (在位 1451-1469 年) に仕えた。ヒジュラ暦 880 (1475/6) 年ごろ没 [Blair 2006: 279-80, 283; Huart 1908: 215; Semsar & Umar (Els) Aẓhar Tabrizi]。 (N)

Mawlānā Aẓhar が Ğa'far b. 'Alī Tabrizi の弟子であるとする Semsar の説は、例えば TR によって裏付けられるが [TR: 315]、本書の説明とは整合しないことになる [Semsar & Umar (Els) Aẓhar Tabrizi]。 (M)

- ⁹¹ Mawlānā Muḥammad Awbahi. QKh によると、Ğa'far Tabrizi の弟子。次注の Mawlānā Yārī の師であり、Mawlānā Sulṭān 'Alī Mašhādī からも師と呼ばれているという。Mašhad でヒジュラ暦 951 (1544/5) 年に没したとされる [QKh: 312]。 (N)

- ⁹² 底本は Mawlānā Bārī Harawī とするが、写本はいずれも Bārī ではなく Yārī とするので、テキストを改めた [AA Ms. A: 48v; AA Ms. B: 53v; AA Ms. C: 42v]。QKh や GH は、Hirāt で終生を過ごした書家として、Mawlānā Yārī に言及するが、本書が指しているのはこの書家かもしれない [GH: 106; GH (Etr.): 164-154; QKh: 312]。これとは別に GH は画家 Bihzād と同じ時代に活動した写本彩飾師 (muḍahhib) たる Mawlānā Yārī に言及している。この写本彩飾師には TR および HI も言及しており、後者は同人が Sulṭān Ḥusayn Mirzā の時代に Mir 'Alī-šīr のもとで活動したことを伝えている [GH: 144-145; GH (Etr.): 188; TR: 319; HI: I, 228]。Mawlānā Yārī の写本彩飾の作例としては、ヒジュラ暦 893 年ラジャブ月 (1488 年 6 月) に製作された、Bihzād 作画、Sulṭān 'Alī (注 93) 筆記の *Būstān* 写本がある [Ettinghausen EI2: Bihzād]。しかしいずれの史料も同人の素養として、書道の技芸に触れてはいないので、本文の Mawlānā Yārī をこの写本彩飾師に引き当てるのは困難である。なお「アルバム序文」はこの人物への言及を欠く [IAF: 264]。 (M)

- ⁹³ Mawlānā Sulṭān 'Alī Mašhādī. QKh は、彼と Mawlānā Aẓhar の関係を、'Alī b. Hilāl と Ibn Muqla の関係のごとく、直接ではないが前者は後者の書いたものから多くを学んだとしており、本文の記述に近い。また、QKh は Sulṭān 'Alī Mašhādī による詩を引用し

ラーナー・アズハルから習ったわけではないが、彼が書いたものから多くを学

ている [QKh: 312-313]。DDM は、ナスターリークにおいては彼以上の書家はいないと評価している [DDM: 265]。(N)

KhA の書家列伝は、Mawlānā Ġāfar 以降、彼に並ぶ書家はいないと伝える [KhA: 237-238]。また HS によると、彼は「過去および現在の書家たちの書を消し去ってしまうほどに、ナスフとタアリークの書体に熟達していた」という。この書家が Sultān Husayn Mirzā および Amir Nizām al-Dīn ‘Alī-Šīr のために書を作成していたとの HS の所伝は、Bābur のそれと同様である [HS: IV, 351-352; BN: 282-283; GH: 59-61; GH (Etr.): 101-102; 久保 1990: 41]。なお同人の師については、TR がそれを Mawlānā Azhar と明示し、この点は HI も同じであって、本書の説明とは食い違っている [TR: 315; HI: II, 206-207]。また同人の死没を HS およびこれに拠った MM がヒジュラ暦 919 (1513/4) 年、Mašhad のことと伝える一方 [HS: IV, 352; MM: II, 490]、GH はヒジュラ暦 926 年ラビー・アルアッワル月 10 日 (1520.3.10) とするが、同人が記した書道の小論 (risālah) がヒジュラ暦 922 年ムハッラム月 (1516 年 2/3 月) に完成しているのだから、後者の年代に理がある [GH: 78; GH (Etr.): 124, n. 405]。Sultān ‘Alī の書蹟の現存例については Huart が簡単に述べるとおりであるし、各所蔵機関の写本カタログから遡及できるものも数多いので、ここでは列挙しない [Huart 1908: 221-223]。むしろ注意すべきは、同人がムガル帝国においてその筆蹟が珍重された書家の一人であったことである。例えば Abū al-Faḍl は、第二代君主 Humāyūn が 1535 年に発動した Guḡarāt 地方への遠征の際、Kambhāyat 郊外で敵兵の急襲に遭い、携行していた「貴重な書籍の数々」のほとんどを失ったことを記しているが、その中で特に書名を挙げたのは「Mullā Sultān ‘Alī の筆写、Bihzād 師の挿絵による *Timūr Nāmah*」であった（この *Timūr Nāmah* とはおそらく Yazdī の *Ẓafar Nāmah* のことである）[TG: 21; AN: I, 136]。この他、同人筆写の写本がムガル帝国宮廷の書院に所蔵されていたことが、写本に書き込まれた出納記録等から判明する諸例については Seyller の労作を見よ [Seyller 1997: 280, 282, 286-287, 293, 295, 297, 299-300, 303, 314, 321, 323, 335, 342, 345]。また同人の書蹟は、Ġahāngīr および Šāh Ġahān 時代に製作された書画帖 (muraqqa‘) の素材として活用されることで伝世した。例えば、いわゆるケヴォルキアン・アルバムから分かれた一葉としてメトロポリタン美術館に所蔵されるもの [Welch et al. 1987: 112-113, 142-143, 240-241, nos. 17, 30, 78]、ワンティジ・アルバムの一葉としてヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に所蔵されるもの [Clarke 1922: no. 32, pl. 22]、単葉としてチェスター・ビーティー図書館に所蔵されるもの [Leach 1995: 412, no. 3.30] がある。(M)

んだ。そして、彼の弟子のうち6人⁹⁴、スルターン・ムハンマド・ハンダーン⁹⁵、スルターン・ムハンマド・ヌール⁹⁶、マウラーナー・アラー・アッディーン・ハラ

94 QKhは、HirātにおけるSulṭān ‘Alīの高名な弟子を6人とし、本書と同様の順番で列挙している [QKh: 313-314]。(N)

Sulṭān ‘Alīの弟子たちとして諸史料 (TR, HI, GH) が列挙するものには本書の所伝に重ならない部分がある (以下、本書の所伝と重ならない人物名に下線を付する)。TR: Mawlānā ‘Alā al-Dīn, Sulṭān Muḥammad Ḥandān, Mawlānā Muḥammad Abriṣāmī, Mawlānā Zayn al-Dīn Maḥmūd, Sulṭān Muḥammad Nūr, Qalandar Kātib [TR: 316-317]. HI: Mawlānā ‘Alā al-Dīn, Mawlānā Sulṭān Muḥammad Ḥandān, Mawlānā Sulṭān Muḥammad Nūr, Qalandar Kātib, Mawlānā Zayn Maḥmūd [HI: II, 207]. GH: Mawlānā Mīr ‘Alī, Mawlānā Muḥammad Abriṣāmī, Mawlānā Sulṭān Muḥammad Nūr, Mawlānā Sulṭān Muḥammad Ḥandān, Mawlānā Zayn al-Dīn Maḥmūd, Mawlānā Mīr ‘Alī Ḡāmī [GH: 62]。(M)

95 Sulṭān Muḥammad Ḥandān. Sulṭān ‘Alī Maṣhādīの弟子。QKhは、彼をHirātにおけるSulṭān ‘Alīの6名の高弟の一人とし、両者の関係をYāqūt Musta‘īmīとAḥmad Suhrawardīの関係になぞらえている [DDM: 266; DQM: 281; QKh: 313]。(N)

KhAの書家列伝は、同人がナスタアリク体を得意としたばかりでなく、箏笛 (nay) の演奏にも秀でていたと伝える [KhA: 239; 久保 1990: 41]。HSはSulṭān Ḥusayn Mirzāに仕えて、書をよくしたMawlānā Sulṭān Muḥammad Ḥandānが「彼は現在すばらしき町Hirātに暮らしている。ときどき立派な書の揮毫に取り組んでいる」と伝えており、GHもHirātにおける活動を記している [HS: IV: 363; GH: 62, 86-87; GH (Etr.): 106, 134]。没年については、17世紀後半に成立したMAがヒジュラ暦915 (1509/10) 年を伝えており、Blochmannもこれに従ったものと考えられるが [MA: 471; AA (Etr.): I, 108, n. 3]、1521年ごろに執筆されたLNは同人を存命者として扱っているので、MAの年代には従いがたい [LN: 148]。同人の書写によるḤāfiẓ詩集の写本 (大英図書館所蔵。Add. 7760) の作成年代について、Rieuはヒジュラ暦921 (1515/6) 年とし、Seyllerは同941 (1534/5) 年と記述するが、いずれにせよMAの年代の否定材料である [Rieu 1879-1883: II, 628b-629a; Seyller 1997: 293]。またHuartが同950 (1543) 年と説明する根拠は不明である [Huart 1908: 224]。Akbar時代に製作されたFreer Gallery of Art所蔵の詩文選集 (いわゆる「ピフザード・アルバム」, F1944.48) に収録された書蹟の書家の一人として名が挙がる [Seyller 1997: 284-285]。(M)

96 Sulṭān Muḥammad Nūr. QKhは、彼をHirātにおけるSulṭān ‘Alīの6名の高弟の一人とし、Yāqūt Musta‘īmīの弟子Argūn Kāmīliになぞらえている。また、彼が小字を得意としたこと、Buḥārāに埋葬されていることを伝える [QKh: 313-314]。一方DDMは、彼の師をMawlānā Mu‘īn al-Dīn Wā‘iẓなる書家とする [DDM: 266]。DQMは、ナスタアリクを良くした書家としてSulṭān Muḥammad Nūrを挙げるが、師には触れていない [DQM: 281]。(N)

KhAの書家列伝には、Mawlānā Sulṭān Muḥammad Nūrが‘Alī Šīrの支援によって腕を上げ、ハフィーのナスタアリクでは彼よりうまく書ける者はいない、との記事がある [KhA: 239]。なお久保はKhAの写本資料に依拠して、同人の名をMawlānā Sulṭān Muḥammad b. Mawlānā Nūrとしている [久保 1990: 41]。これは、HSにおいて「当代におけるナスフ・タアリクの書家たちの中心人物」として言及されているMawlānā Sulṭān Muḥammad b. Mawlānā Nūr Allāhと同じであり、GHはこの名の人物の通称が

ウィー⁹⁷、マウラーナー・ザイン・アッディーン⁹⁸、マウラーナー・アブディー・

Sulṭān Muḥammad Nūrだったと説明している。またこの人物が Mawlānā Sulṭān 'Alī Maṣḥadī の弟子であったことは GH にも記事がある [HS: IV, 363; GH: 86; GH (Etr.): 134]。以上のごとく、同人の父が Mawlānā Nūr Allāh であったことは明らかなので、Sulṭān 'Alī Maṣḥadī の子だとする Huart の説明は誤りである [Huart 1908: 224]。また同人の筆蹟としてはヒジュラ暦 905 (1499/1500) 年に製作した詞華集の写本があり、これは着色およびマーブル模様をほどこされた料紙を用いている点で、写本学上の意味を持つ作品でもある [Blair 2006: 55]。メトロポリタン美術館に所蔵されるこの写本 (Acc. no. 1997.71) の画像の一部は同館のホームページで閲覧でき、そこに付された詳細な解説は、マーブル模様とみなす Blair の所見に異論があることを教えている (URL: <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/453385>)。Akbar 時代に製作された Freer Gallery of Art 所蔵の詩文選集 (いわゆる「ビフザード・アルバム」, F1944.48) に収録された書蹟の書家の一人として名が挙がる [Seyller 1997: 284-285]。また同人の筆になる Ġāmi 著 *Tuḥfat al-Ahrār* 写本 (1515/6 年 Buḥārā で製作) はムガル帝国の書院を経て、今日 Arther M. Sackler Gallery に所蔵されている (S86.0052) [Seyller 1997: 286]。この書家のその他の作例については [Soucek 2003]。(M)

- 97 Mawlānā 'Alā al-Dīn Harawī. QKh は、彼を Hirāt における Sulṭān 'Alī の 6 名の高弟の一人とし、彼の書を Yāqūt Musta'ṣimī の弟子 Yūsuf Ṣāh Maṣḥadī になぞらえている [QKh: 314]。(N)

「アルバム序文」はこの人物の名を Mawlānā 'Alā' al-Dīn Muḥammad Harawī とする [IAF: 264]。KhA の書家列伝には、Mawlānā 'Alā' al-Dīn Muḥammad なる書家が立伝されており、同人が Hirāt の 'Alī-Ṣīr の書院でナスターリークを学んで上達したことを伝えている [KhA: 239; 久保 1990: 41]。Huart は、'Alā al-Dīn Muḥammad なる書家 (1542 年没) が Amīr Ḥusraw の『五部作』その他の作品をしばしば書写したと説明している。その根拠史料は不明だが、'Alā' al-Dīn Muḥammad Harawī なる人物によって Balḥ 1503/4 年に書写され、その Akbar の書院に入り、帝国に伝世した『五部作』写本がある (フランス国立図書館 Supplément persan 1954 (1)) [Seyller 2001: 151]。(M)

- 98 Mawlānā Zayn al-Dīn. QKh は、彼を Hirāt における Sulṭān 'Alī の 6 名の高弟の一人とし、Yāqūt Musta'ṣimī の弟子 Pīr Yahyā Sūfī になぞらえている。また、彼が Sulṭān 'Alī Maṣḥadī の娘婿であったため Dāmād と呼ばれていることや、Maḥmūd という名にも言及している。没年はヒジュラ暦 925 (1519) 年とされる [QKh: 314]。DQM と GH は Sulṭān 'Alī Maṣḥadī の弟子の一人として Zayn al-Dīn Maḥmūd を挙げている [DQM: 281]。(N)

KhA の書家列伝は Mawlānā Zayn al-Dīn Maḥmūd に言及し、同人がナスターリーク体を得意としたこと、Sulṭān 'Alī Maṣḥadī の弟子の一人であることを伝えている [KhA: 238; 久保 1990: 41]。TR はこの人物が、Sulṭān 'Alī Maṣḥadī の娘婿 (dāmād) だということ [TR: 317]。17 世紀後半の MA は、同人が Nišāpūr 出身であること、Mir 'Alī-Ṣīr の保護下にあったこと、ヒジュラ暦 918 (1512/3) 年に死去したことを付け加えている [MA: 471]。後出する名手 Mir 'Alī の師でもあったことについて TR と GH の所伝は一致する [TR: 317; GH: 78; GH (Etr.) 126]。(M)

ニーシャープーリー⁹⁹、ムハンマド・カーシム・シャーディー・シャー¹⁰⁰が名を上げた。彼らそれぞれは一流の仕方を書いた。そして魅力的な集団が続いた。マウラーナー・スルターン・アリー・カーイニー¹⁰¹、マウラーナー・スルター

99 Mawlānā ‘Abdī Nišāpūri. QKh は、彼を Hirāt における Sulṭān ‘Alī の 6 名の高弟の一人とし、Yāqūt Musta‘šimī の弟子 Mubārak Šāh になぞらえている [QKh: 314]。また、DDM は甥 Šāh Maḥmūd Nišāpūri の師として、TAA では Šāh Ṭahmāsp 時代にナスタアリークで知られた書家として名前が挙げられている [DDM: 272; TAA: 170]。(N)

LN は同人の名を Mullā ‘Abdī Qalandar としており、Nišāpūri という帰属表示も与えている。Sulṭān ‘Alī Maṣḥadī の弟子として TR, HI が挙げる Qalandar Kātib は同じ人物を指す [LN: 148; TR: 317; HI: II, 207]。Soucek が指摘するとおり、TS が (1550 年ごろ成立)、「ここ 2 年の間に」同人が亡くなったことを伝えていることは、その没年の参考材料となる [TS: 134; Soucek (EIr): ‘Abdī Nišāpūri]。また TS に立伝されることにも反映されているとおり、同人が主にサファヴィー朝君主 Šāh Ṭahmāsp のもとで活動したことは GH も述べておりである。GH はさらに、後出の Šāh Maḥmūd Nišāpūri が同人の甥 (ḥwāhar-zādah) であると同時に弟子でもあったことを伝えている [GH: 87; GH (Etr.): 134]。(M)

100 Muḥammad Qāsim Šādī Šāh. QKh は、彼を Hirāt における Sulṭān ‘Alī の 6 名の高弟の一人とし、Yāqūt Musta‘šimī の弟子 Sayyid Ḥaydar Gundah-nawīs になぞらえている [QKh: 314]。一方 DDM は、彼を Sulṭān Muḥammad Nūr と Sulṭān Muḥammad Ḥandān の弟子とする [DDM: 266]。(N)

本書の所伝と異なり、TR は同人を前出の Sulṭān Muḥammad Ḥandān の弟子としている [TR: 317]。Akbar 時代に製作された Freer Gallery of Art 所蔵の詩文選集 (いわゆる「ピフザード・アルバム」、F1944.48) に収録された書蹟の書家の一人の名として、Muḥammad Qāsim ibn Šādī Šāh 「シャーディー・シャーの息子ムハンマド・カーシム」との記入があるという [Seyller 1997: 284]。もしこれを信ずるなら、この書家の名は Muḥammad Qāsim-i Šādī Šāh とエザーフエを付して読むべきことになる。Muḥammad Qāsim Šādī Šāh 名の書家による書蹟としては他に、1527 年書写の Sa’dī 著 Būstān 選録写本 (Art and History Trust Collection (米国)) が知られる [Seyller 1997: 288]。また 1523 年書写の Sa’dī 著 Būstān 写本 (チェスター・ビーティー図書館所蔵。Ms. 297) の写生字 Muḥammad Qāsim al-Harawī は同じ書家かもしれない [Seyller 1997: 337]。GH は Mawlānā Qāsim Šādī Šāh という名で立伝し、その没年をヒジュラ暦 950 (1543/4) 年とするともに、その弟子の一人として、サファヴィー朝のもとで活動した著名な書家で、本書には言及されていない Dūst Muḥammad を挙げる [GH: 89-90, 99; GH (Etr.): 138, 146-147]。Dūst Muḥammad については [Adle (EIr): Dūst-Muḥammad Heravī]。(M)

101 Mawlānā Sulṭān ‘Alī Qā’inī. DDM は、彼がアクココンル君主 Ya’qūb (在位 1478-1491 年) に仕えたと伝える [DDM: 266]。DQM にも名前が挙げられている [DQM: 281]。(N)

KhA の書家列伝にはナスタアリークの名手として伝があり [KhA: 238; 久保 1990: 41]、TR は前出の Mawlānā Aẓhar の弟子とする [TR: 315]。この書家が主として、アクココンル支配下の Tabriz で活動したことについては [Soucek (EIr): ‘Alī Qā’eni]。なお MA はナスタアリークをよくした同人の経歴について、Mīr ‘Alī Šīr の保護下にあつて Sulṭān Ḥusayn Bāyqarā の子の一人の訓育にあたり、ヒジュラ暦 914 (1508/9) 年死去したことを伝えている [MA: 472]。本書の英語訳注もこの所伝に従ったものと思われる

ン・アリー・マシュハディー¹⁰²、マウラーナー・ヒジュラーニー¹⁰³もまた、この文字を書くことにおいて腕前を示した。続く達人の筆頭は、マウラーナー・ミール・アリー・ハラウィー¹⁰⁴である。表向きはマウラーナー・ザイン・アッディー

が、Soucekはこの没年については懐疑的である [AA (Etr.): I, 108, n. 5; Soucek (EIr): 'Ali Qā'eni]。 (M)

- 102 Mawlānā Sulṭān 'Ali Maṣḥadī. DQMは、ナスタアリークを良くした書家として、Mawlānā Sulṭān 'Ali Qā'iniと並べてMawlānā Sulṭān 'Ali Sabz Maṣḥadīを挙げる [DQM: 281]。 (N)

文脈上、この人物が既出のスルターン・アリー・マシュハディーと同じであるはずがない。IAFの「アルバム序文」はこの人物の名をMawlānā Sulṭān 'Ali Šīr Maṣḥadīとしており、このことはBlochmannも指摘している [IAF: 265; AA (Etr.): I, 108, n. 7]。一方、KhAの書家列伝にはMawlānā Sulṭān 'Ali Sabz Maṣḥadīなる書家がナスタアリークを得意とした旨の伝がある [KhA: 238; 久保 1990: 41]。Šīr と Sabz の字形は相似るので、ことによると前者は後者の誤記であって、いずれも同じ書家を指しているのかも知れない。なおMAはMawlānā 'Ali Šīr Maṣḥadīなる書家を立伝して、Sulṭān Ḥusayn Bāyqarā時代にMīr 'Ali Šīrのもとで活動したナスタアリークの名手であったとしている [MA: 473]。 (M)

- 103 Mawlānā Hiḡrānī. この書家の名前の綴りには問題があるかもしれない。KhAの書家列伝によると、'Ali Šīr の書院で活動し、ナスフ・タアリークを得意とした書家Mawlānā Buḡrānīが立伝されている [KhA: 239; 久保 1990: 41]。HiḡrānīとBuḡrānīの字形は相似るので、ことによると前者は後者の誤記かも知れない。一方Awrangzib時代の史書MAに収録された書家列伝は、Hiḡrānīと記し、その人物が'Ali Šīrの朋友 (nadīm) であって、ナスタアリーク体をよくし、ヒジュラ暦921年 (1515/6) に死去したとしている。英語訳の注釈もおそらくこれを根拠としたものであろう [MA: 472; AA (Etr.): I, 108, n. 7]。 (M)

- 104 Mawlānā Mīr 'Ali Harawī. QKhではMawlānā Zayn al-Dīn Dāmādの弟子とされ、さらに彼とSulṭān 'Ali Maṣḥadīの関係がYāqūt Musta'şimīとその孫弟子'Abd Allāh Şayrafiの関係になぞらえられている。特に大字に優れていた。最初Hirātの支配者に仕え、のちにBuḡarāに移ったという。没年はヒジュラ暦902 (1496/7) 年とされるが、数字が抜けている可能性がある。QKhには彼の詩が数編引用されている。QKhの作者Maḡmūd b. Muḡammadは、おそらく彼の弟子筋にあたる [QKh: 314-315]。なお、QKhの最終章第2部 (ナスタアリークの書家) に登場する書家のうち、AAで言及されていないのは、BuḡarāでMīr 'Ali の弟子になり、同地の支配者'Abd al-'Aziz Ḥānに仕えたのちMaṣḥadに移動したとされるSayyidi Aḡmadのみである [QKh: 315-316]。 (N)

TRはこの書家の師として、本書の記述に対して、Mawlānā Zayn al-Dīnを挙げるに留まっており、この点はHIも同様である [TR: 317; HI: II, 207]。一方GHが、当初Mawlānā Zayn al-Dīnに師事し、その後にMawlānā Sulṭān 'Aliに師事したと説明している点は本書と同様である [GH: 62, 78-79; GH (Etr.): 106, n. 341, 126]。師弟関係に関する諸説を含め、同人に経歴については [Soucek (EIr): 'Ali Heravi] が詳しい。この書家とムガル帝国との関係については不明である。MAhおよびGHに採録された同人の詩 (qit 'ah) は、初代君主Bāburを賞賛して、「ティムール家の誉れ」と形容している [MAh: 176; GH: 80; GH (Etr.): 129]。Welch編の図録に寄稿したSchimmel、およびSoucekが指摘するとおり [Welch et al. 1987: 99; Soucek (EIr): 'Ali Heravi]、この詩はBāburに

ンに師事したが、マウラーナー・スルターン・アリーの書を師とした。そして

対するこの書家の敬意を裏付ける材料ではあるが、これが詠まれた時期は不明であって、帝国建設の後であるか否かも判然としないので、評価は難しい。なおミントー・アルバムの一葉をなす同人の書蹟は、Bāburに対する別のチャガタイ・トルコ語の対句一連を冒頭に配し、これに、相手を賞賛する四行詩 (rubā'i) を後続させ、Buḥārāにおいて執筆した旨のMir 'Aliの識語で締めくくる仕立てとなっている。但し、その四行詩はHSの簡潔なMir 'Ali伝に引用されているごとく [HS: IV, 617-618]、元来Bāburとは全く無関係の文脈で詠まれたものであるし (この四行詩はGHにも引用されている [GH: 81; GH (Etr.): 129, n. 433])、書蹟の別区画に貼り込まれたBuḥārāの識語が、対句ないし四行詩のいずれかに属している保証もない。つまり、この一葉は、それぞれ異なる文脈を備えたMir 'Aliの文句を貼り合わせて、帝国始祖Bāburへの賛辞と見える一連の書蹟と見えるように作り出されたムガル帝国の書院の産物とみるほうが妥当であろう (ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に所蔵されるこの一葉の写真は [Stronge 2002: 170, pl. 135])。仮にそうだとすると、Schimmelのごとく、この一葉をMir 'AliのBāburに対する態度をあらわす資料とは見なすべきではなく [Welch et al. 1987: loc. cit.]、むしろ帝国の始祖と令名高き王朝故地の能書家とを付会させることが意味を持ち得たĠahāngirないしŠāh Ġahān時代の帝国の歴史意識を反映する材料と見なせるはずである。たしかに、この書家の筆蹟は、ムガル帝国の宮廷において、Mawlānā Sulṭān 'Aliと並んで珍重された。Ġahāngirは、同人の筆によるYūsuf Zulayḥāの金箔押し豪華写本が献上されたことを記録しており、同人について画家 (muṣawwir) にして写本彩飾師 (muḍahhib) と説明している [JN (T) : 96; JN (A) : 81]。この他、同人筆写の写本がムガル帝国宮廷の書院に所蔵されていたことが、写本に書き込まれた出納記録等から判明する諸例についてはSeyllerの労作を見よ [Seyller 1997: 281, 284-285, 286, 298, 301, 303, 324, 329, 331, 335, 336, 339]。またĠahāngirおよびŠāh Ġahān時代に製作された書画帖の素材として、その書蹟が用いられたことは既出のMawlānā Sulṭān 'Aliと同様であるが、その例ははるかに数多く、その人気の差は歴然としている [真下 2014: 286-286]。目録作成者の所見にかかわらず、Mir 'Aliの署名が確認できる書蹟に限っても、いわゆるケヴォルキアン・アルバムから分かれた一葉としてメトロポリタン美術館に所蔵されるもの [Welch et al. 1987: 108-109, 124-125, 156-157, 168-169, 206-207, 214-215, 222-223, 228-231, nos. 15, 22, 36, 42, 61, 65, 69, 72, 73]、同じアルバムから分かれた一葉としてフリーア美術館に所蔵されるもの [Welch et al. 1987: 106-107, 116-117, nos. 14, 19]、ワントン・アルバムの一葉としてヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に所蔵されるもの [Clarke 1922: nos. 33, 34, pls. 23, 24; Stronge 2002: 168, pl. 132] (ClarkeおよびStrongeの図録に収録されていない以下の事例は同博物館のホームページで閲覧できる画像によって調査した (URL: <https://collections.vam.ac.uk/>) : IM 111a-1921, IM 118a-1921, IM 121a-1921, IM 124a-1921, IM 129a-1921, IM 137a-1921, IM 138a-1921, IM 139a-1921)、ミントー・アルバムの一葉としてチェスター・ビーティー図書館に所蔵されるもの [Wright 2008: 288-291, 299-301, 304-305, 308-309, 312-313, 321, 324-325, 326-328, 331-332, 347-348, 359-361, nos. 36B, 38B, 39B, 40B, 41B, 43B, 44B, 45B, 46B, 50B, 53B] を列挙できる。なおMir 'Aliの没年について、MAはヒジュラ暦951 (1544/5) 年を伝えており、Soucekもこれに従っている [MAh: 177]。Soucekが示す同人に帰せられる作例の年代の数々に照らしても、MAが伝えるヒジュラ暦924 (1518/9) 年という年代には従いがたい [MA: 477]。なお後出する同人の息子Mawlānā Bāqir (注128) は、ムガル帝国において書家として活動した。(M)

高い理解力の輝きによって手法の変革を行い、顕著な変化を残した。ある者が「あなたの字とマウラーナーの字の違いは何か」と尋ねたところ、彼の答えは以下の通りであった。「完成の水準に達しているのは私も同じだが、彼の字には異なった味わいがあるのだ」¹⁰⁵。シャー・マフムード・ニーシャープーリー¹⁰⁶、

105 IAFの「アルバム序文」はこの返答としてやや異なる言葉を伝えている：「完成の水準に達しているのは私も同じだが、マウラーナー・スルターン・アリーの子が持っている味わいは私の字にはない」[IAF: 265]。(M)

106 Šāh Maḥmūd Nišāpūri. QKhではMawlānā Maḥmūd Šāh Nišāpūriと呼ばれ、おじ(ḥāl)のMawlānā ‘Abdī Nišāpūriの弟子であったとされている[QKh: 315]。DDMは執筆当時にサファヴィー朝に仕えていた書家として言及し、QKhと同様おじMawlānā ‘Abdī Nišāpūriの弟子とする[DDM: 272]。(N)

TSによるとこの書家はSulṭān ‘Alī Maṣḥadīの弟子であったが、本当はMawlānā ‘Abdī Nišāpūriの弟子であったという[TS: 133]。GHはŠāh Maḥmūd NišāpūriがMawlānā ‘Abdī Nišāpūriの甥(ḥwāhar-zādah)であると同時に弟子でもあったといい、サファヴィー朝君主 Ṭahmāspのもとで活動し、1564/5年に没したと伝えている[GH: 87-89; GH (Etr.): 134-138]。この書家の経歴や作品についてその他の詳細は[Simpson 1997: 254-269]を見よ。ムガル帝国の宮廷に蔵された経歴のあるこの書家の作品としては、Ġāmī著 *Haft Awrang* 写本 (Freer Gallery of Art所蔵。F1946.12。この写本に付された注記や印章等の詳細な記述は[Seyller 1997: 285-286]にあり、同写本に関する専著は[Simpson 1997])、1543/4年書写のĠāmī著 *Yūsuf wa Zulayḥā* 写本 (フランス国立図書館所蔵。Supplément persan 1919) [Seyller 1997: 297]、1551年書写のSa’dī著 *Būstān* 写本 (チェスター・ビーター図書館所蔵。Ms. 221) [Seyller 1997: 302]。(M)

イスハークの子マフムード¹⁰⁷、シャムス・アッディーン・キルマーニー¹⁰⁸、マウラーナー・ジャムシード・ムアンマーイー¹⁰⁹、スルターン・フサイン・ホジャン

107 *Maḥmūd-i Ishāq*. QKh には、*Mir 'Ali Harawī* の弟子として、タアリークとナスタアリークに優れた *Mawlānā Maḥmūd Ishāq Siyāwušānī* が見える。また、TAA では、*Šāh Ṭahmāsp* 時代に *Ḥurāsān* や *Irāq* においてナスタアリークで知られた書家の筆頭として、*Mawlānā Maḥmūd Ishāq Siyāwušānī* という書家が挙げられている [QKh: 316; TAA: 170]。 (N)

GH は、*Ḥwāḡah Ishāq al-Šihābī* の息子で、既出の *Mawlānā Mir 'Ali Harawī* に師事した書家 *Ḥwāḡah Maḥmūd* を立伝している。その記事は、同人が *Buḡārā* から *Balḥ* に移ったことを伝えるに留まるが [GH: 84-85; GH (Etr.): 131-132]、MSH は、同じく *Mawlānā Mir 'Ali Harawī* の弟子であった *Mir Kulangī* (注130) とともに *Akbar* の宮廷に到来して、その書院で『ハムザ物語』*Qiṣṣah-i Ḥamzah* の写本の浄書に従事したことを伝える [MSH: 54]。MA 所伝の *Mawlānā Ḥwāḡah Maḥmūd* も同じ書家を指しているはずである [MA: 477-478]。フダーバフシュ図書館には、この書家の筆になる *Diwān-i Mirzā Kāmran* (第二代君主 *Humāyūn* の弟 *Kāmran* がペルシア語およびテュルク語でものした) の孤本が所蔵されている。その奥書に記された写字生の自称 *Maḥmūd bun Ishāq al-Šihābī al-Harawī* によって、この書家 *Maḥmūd* とその父 *Ishāq* との親子関係は明白であるから、本文の当該箇所「イスハークのマフムード」(*Maḥmūd-i Ishāq*) は、「イスハークの子マフムード」と解すべきことになる。なおその写本の書写年代は明記されないが、著者 *Kāmran* に寄せた祈願文言は彼がまだ存命であることを含意しているから、兄 *Humāyūn* との闘争に敗れて *Makkah* 巡礼に去った *Kāmran* が死去する (1557年10月4日 [AN: I, 331]) 以前に、本書の作成が行われたことになる。その後この写本が1583年には *Abū al-Faḍl* の兄 *Fayḍī* によって閲覧されたこと、さらに *Akbar* 以降の歴代君主の書院に伝わったことは、写本に書き込まれた複数の注記によって確認できる [Abdul Muqtaḍir 1910: 145-156; Seyller 1997: 326-327]。 (M)

108 *Šams al-Dīn Kirmānī*. QKh において、*Sulṭān 'Ali Mašhadī* (注93) の弟子として名前が挙げられている。 *Nizāmī* と *Amīr Ḥusraw* それぞれの五部作を筆写したという [QKh: 316; Roxburgh 2014: 35, 133]。 (N)

109 *Mawlānā Ġamšid Mu'ammā'i*. QKh において、*Sulṭān 'Ali Mašhadī* の弟子としてこの名が挙げられている。 *Mullā Rūmī* の息子であり、*Hirāt* で活動したという [QKh: 316]。 (N)

MN は *mu'ammā'i* として活動した能書家 *Mawlānā Ġamšid* に言及している [MN (T): 101]。これは17世紀初頭のムガル帝国で編まれた詩人伝 *ArAsh* に立伝された *Hirāt* の *Mawlānā Ġamšid Mu'ammā'i* と同じ人物を指している [ArAsh: II, 1016]。この人物は、サファヴィー朝支配下の *Irān* に亡命した *Humāyūn* が訪問した *Mašhad* で幾度も会見た同地の学者たちの一人として名前が挙がる同名の人物と同じであろうか [AN: I, 221]。あるいはGHが、*Hirāt* で活動した能書家で *mu'ammā* にも秀でていたと伝える *Mawlānā Ġamšid b. Mawlānā Aḥmad Rūmī* が、本文の人物と同じであるかもしれない [GH: 90; GH (Etr.): 138]。 (M)

ド¹¹⁰、マウラーナー・アイシー¹¹¹、ギヤース・アッディーン・ムザッヒブ¹¹²、マウ

¹¹⁰ Sultān Ḥusayn Ḥuḡand. QKhには、Mawlānā Ğamšid Mu'ammā'iとMawlānā 'Ayšīの所伝の間に、Muḥammad Qasim Šadi Šah (注100)の弟子で、'Iyālīの号で詩人としても活動したMawlānā Sultān Ḥusayn Ğamšidの名が見える。文脈から考えて、本文のSultān Ḥusayn Ḥuḡandはこの人物に相当する可能性がある [QKh: 316-317]。(N)

¹¹¹ Mawlānā 'Ayšī. QKhは、Mullā Ğamšid (Mu'ammā'i)の弟子として、詩人としても活動したMawlānā 'Ayšīを挙げる。彼はSultān Muḥammad Ḥandānの弟子でもあったという [QKh: 317]。(N)

当初Miḥnatiの雅号で活動していたḤiṣār出身の詩人が、Akbarのもとに到来したときに'Ayšīの雅号を与えられたという [NM: 190v-191r; HI: II, 94; MT: III, 337; ArAsh: V, 2974]。但し以上のムガル帝国側の伝記資料は、Akbar時代にSirhindで没したこの人物の書の素養について触れるところがない。一方、GHはHirāt出身でMašhadに移った後、同地に営まれていたサファヴィー朝王子Sultān Ibrāhīm Mirzā (1577年没)の書院で活動し、その地で没した同名の書家に言及する [GH: 105; GH (Etr.): 153-154]。その書院でこの書家が作成に関与したĠāmi著*Haft Awrang*写本 (Freer Gallery of Art所蔵。F1946.12) およびこの書家に関する詳細は [Simpson 1997: 30, 294-297]。以上の二人の'Ayšīは明らかに別人であるが、本書が指しているのがいずれであるのか否か、定かではない。しかしこの書家の前後に本書で言及される書家たちにティムール朝からサファヴィー朝にわたる時期の中央アジア、Īrānで活動した者が頻出することを考慮すると、後者にあたる可能性が高い。(M)

¹¹² Ġiyāt al-Dīn Muḡahhib. QKhは、Mawlānā Sultān 'Alī Mašhadiの弟子としてMawlānā Ġiyāt al-Dīn Muḡahhib Mašhadiを挙げている。なお、同時に名前が挙げられているMuḥammad Abrišāmīは本文では名前がないが、DDMやDQMでもSultān 'Alī Mašhadiの弟子として挙げられている [DDM: 266; DQM: 281; QKh: 317]。(N)

GHはSultān 'Alī Mašhadiの同時代の写本彩飾師として同名の人物に言及し、彼がヒジュラ暦942年ジュマダー・アルアッワル月末日 (1535年12月6日) にMašhadで死去し、Sultān 'Alī Mašhadiの墓の傍らに葬られたと伝える [GH: 145; GH (Etr.): 189]。(M)

ラーナー・アブド・アッサマド¹¹³、マウラーナー・マーリク¹¹⁴、マウラーナー・アブド・アルカリーム¹¹⁵、マウラーナー・アブド・アッラヒーム・ハーリズ

- 113 Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad. この名前で知られている書家として、QKhにおいて Sulṭān ‘Alī Maṣḥadī の弟子とされ、‘Abd al-Raḥmān Ġāmī との逸話が伝えられている Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad と、Šīrāz 出身でムガル帝国下のインドに移住し、Šīrīn-qalam という称号で呼ばれている Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad Šīrāzī がいる。前後の文脈から、ここで意図されているのは前者である可能性が高いと考えられる。GH において Sulṭān ‘Alī Maṣḥadī と同時代に活動したとされている ‘Abd al-Ṣamad Maṣḥadī は前者と同一人物であろう。[GH: 147-148; GH (Etr.) : 189; QKh: 317-318; Blair 2006: 554]。(N)

HI には ‘Abd al-Raḥmān Ġāmī (1414-1492) の存命期間に活動した Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad なる書家の名が見える。これが本書が指す書家と同じであることの確証はない [HI: II, 207]。なお AA は書家 Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad を、Šīrāz 出身の画家 (muṣawwir) Ḥwāḡah ‘Abd al-Ṣamad Šīrīn-qalam と区別している。当然 AN も同じ呼称をこの画家に用いる [AN: II, 42; III, 227, 404]。MT も Ḥwāḡah ‘Abd al-Ṣamad とし [MT: III, 51, 310]、後代の JN も同様 [JN (T): 10, 24]。但しこの画家を THA は Mullā ‘Abd al-Ṣamad [THA: 65-69] ないし Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad [THA: 177] と呼んでおり、同時代の史料においても両名の区別は十分でなかったことが分かる。(M)

- 114 Mawlānā Mālik. QKh では、Sulṭān ‘Alī Maṣḥadī と Mir ‘Alī Harawī の流れを汲む書家として、Mawlānā ‘Abd al-Ṣamad の次に Mawlānā Mālik Daylamī の名前が挙げられている。Qazwīn で活動し、ヒジュラ暦 969 (1562) 年ズー・アルヒジャ月 18 日に没したとされる [QKh: 318]。また、DQM や TAA は、Šāh Ṭahmāsp 時代にナスタアリークで知られた書家として Mawlānā Mālik al-Daylamī Qazwīnī を挙げる。GH は、Šāh Ṭahmāsp の息子 Sulṭān Ibrāhīm Mirzā に見え、Qazwīn の Čihil-sutūn の装飾などを手がけてヒジュラ暦 969 年に没した Mālik al-Daylamī に言及している [DQM: 281; GH: 93-97; GH (Etr.): 141-145; TAA: 170-171; Blair 2006: 436]。(N)

能書家 Mawlānā Mālik Daylamī [GH: 93-97; GH (Etr.) : 141-145; ArAsh: VI, 3984] の他、Qum で活動した能書家 Mawlānā Mālik [GH: 122] が史料に見えるが、本書の Mawlānā Mālik が両者のいずれかにあたるのか否かは定かでない。ただサファヴィー朝王子 Sulṭān Ibrāhīm Mirzā の書院で活動し、ムガル帝国の書院に伝世した Ġāmī 著 *Haft Awrang* 写本 (Freer Gallery of Art 所蔵。F1946.12) の作成にも関与したのは前者であり、本書がこの書家を指している可能性は高い。この書家の経歴や作品について詳しくは [Simpson 1997: 284-293]。(M)

- 115 Mawlānā ‘Abd al-Karīm. この書家に後続して Mawlānā ‘Abd al-Raḥīm Ḥwārazmī が言及されていることを考慮すると、本書が指しているのは、QKh、DQM、TS や GH においてその兄弟として言及される書家であり、Pādšāh という雅号を用いた詩人でもあった Mawlānā ‘Abd al-Karīm であると考えられる。二人の兄弟の父は、書家の Mawlānā ‘Abd al-Raḥmān Ḥwārazmī である [TS: 135; DQM: 282; GH: 58; GH (Etr.) : 101; QKh: 319]。この書家の経歴について詳しくは不明であるが、彼がアココンル君主 Ya‘qūb (在位 1478-1491 年) の保護下で活動したことは確実である。また Soucek によると Ḥwārazmī という帰属表示にもかかわらず、この書家は Šīrāz で生まれた可能性があるという。この書家に帰せられる作品など、詳しい解説は [Soucek (EIr): ‘Abd al-Karīm K‘ārazmī; Gholami & Negahban (EIs): ‘Abd al-Karīm Kh‘ārazmī]。(M)

ミー¹¹⁶、マウラーナー・シャイフ・ムハンマド¹¹⁷、マウラーナー・シャー・マフムード・ザッリーンカラム¹¹⁸、マウラーナー・ムハンマド・フサイン・タブリーズィー¹¹⁹、マウラーナー・ハサン・アリー・マシュハディー¹²⁰、ミール・ムイッ

116 Mawlānā ‘Abd al-Rahīm Ḥwārazmī, 直前に言及された書家 Mawlānā ‘Abd al-Karīm (注115) の兄弟。そのラカブを Nizām al-Dīn と伝える史料もある [DDM: 265]。この兄弟の書のスタイルは父 ‘Abd al-Rahmān から受け継いだ独特のものであったと DQM は伝える一方、QKh は ‘Abd al-Rahīm が Aẓhar Tabrizī (注90) の弟子だったとする。また詩人伝や書家列伝の諸史料では Anisi という号が伝えられているが、GH の所伝によると、その号は彼がアクコニル君主 Ya’qūb の随臣 (anis) であったことによるという [MN (P) : 301; TS: 134; DQM: 282; QKh: 318-319; GH: 57-58; GH (Etr.) : 100-101]。この書家の経歴のさらなる詳細や作品例について詳しくは [Gholami & Umar (EIs) : ‘Abd al-Rahīm Khwārazmī; Soucek (EIr) : ‘Abd al-Rahīm K̲wārazmī]。 (M)

117 Mawlānā Šayḥ Muḥammad, DDM は Nizām al-Dīn というラカブを挙げている [DDM: 272]。GH によるとこの書家は Sabzawār 出身であり、スルス体の書家 (tult-nawīs) たる Mawlānā Šayḥ Kamāl の息子であって、サファヴィー朝王子 Sulṭān Ibrāhīm Mirzā が Mašhad に営んだ書院で活動したという。[DDM: 272; GH: 142-144]。その経歴について詳しくは [Simpson 1997: 310-315]。 (M)

TAA には、Šāh Ṭahmāsp 時代の画家として、ナスターリークでも知られた Mawlānā Šayḥ Muḥammad Sabzawāri が見える [TAA: 176]。 (N)

118 Mawlānā Šāh Maḥmūd Zarrīn-qalam, QKh において、Ġa’far Tabrizī の弟子とされている書家か。TAA において、Šāh Ṭahmāsp 時代のナスターリークの書家としてこの名前が挙げられている [QKh: 312; TAA: 170]。GH は既出の Šāh Maḥmūd Nišāpūri (注106) に Zarrīn-qalam の称号を付しており、両者が混同されている可能性がある [GH: 87-89]。 (N)

119 Mawlānā Muḥammad Ḥusayn Tabrizī, GH によると Mašhad で Mīr Sayyid Aḥmad Mašhadi に師事して書の腕を上げ、Šāh Ismā’il 二世 (在位1576-1578年) の王宮の碑文作成を任されるほどであったが、若くして亡くなったという。その弟子として Mawlānā Muḥammad Amin が伝えられているが、これは後出する Muḥammad Amin Mašhadi (注129) に同じである可能性がある [GH: 119, 123; ArAsh: VI, 3609-3610; MA: 478]。ムガル帝国の書院に蔵された経歴のある Muḥammad Ḥusayn Tabrizī なる書家の書写による写本 (現在所在不明) が Seyller によって報告されているが「1525-50年ごろ」というその製作年代は上記の活動年代に整合的とは考えにくいので、さしあたり別人の作品と見なしておきたい [Eslami (EIr) : ‘Emād Ḥasani; AA (Etr.) : I, 109; GH: 119; GH (Etr.) : 165; Seyller 1997: 340]。 (M)

TAA は Šāh Ṭahmāsp 時代のナスターリークの書家として名前を挙げており、兄弟 Muḥammad ‘Alī もウラマーとして知られていたと伝える [TAA: 158, 170-171]。 (N)

120 Mawlānā Ḥasan ‘Alī Mašhadi, 直前の Muḥammad Ḥusayn Tabrizī と同じく、Mīr Sayyid Aḥmad Mašhadi に師事し、ヒジュラ暦1003 (1594/5) 年に没した書家として GH に見える [GH: 91]。MA にも Mīr ‘Alī Harawī の流れをくむナスターリーク体の書家として名が挙がる [MA: 478]。 (M)

ズ・カーシー¹²¹、ミールザー・イブラーヒーム・イスファハーニー¹²²や他の何人かも、この技 (taşwīr) に貴重な人生を費やした¹²³。

国の主たる御方の慧眼と鑑定眼により、さまざまな文字が高い段階を勝ちえて、傑出した腕前を備えた技芸の熟達者たちにとって<I, 115>活躍の場 (rūz-i bāzār) が生まれた。とりわけナスタアリーク体はますます普及した。そしてカリフ位の王座の庇蔭のもと、心に染み入るこの書字の名手と呼ばれうる麗筆の人はムハンマド・フサイン・カシュミーリー¹²⁴である。彼はザッリーンカラム

121 Mir Mu'izz Kāshī. TAAにおいて、Šāh Ṭahmāsp時代にKāšānと'Iraqで名声を博した書家として名前が挙げられているMir Mu'izzi Kāshīと同一人物か [TAA: 171; Roxburgh 2014: 130]。 (N)

MAにMir 'Alī Harawīの流れをくむナスタアリーク体の書家として名が挙がる [MA: 478]。この書家は、GHがKāšān出身の書家として伝えるMir Mu'izz al-Dīnと同じかもしれない。この書家はヒジュラ暦995 (1586/7) 年に亡くなったが、その作品は商人たちがインドに持って行っていたという [GH: 119]。 (M)

122 Mirzā Ibrāhīm Iṣfahānī. TAAには、Šāh Ṭahmāsp時代に知られた書家としてMirzā Ibrāhīm Iṣfahānīの名が見える [TAA: 172]。 (N)

MAにMir 'Alī Harawīの流れをくむナスタアリーク体の書家として名が挙がるが、詳細は不明である [MA: 478]。 (M)

123 Šāh Maḥmūd Nišāpūrī以降Mirzā Ibrāhīm Iṣfahānīに至る17名の書家の列挙は、「アルバム序文」においてはかなり異なり、以下の6名が挙がるに過ぎないし、その中には本書AAが言及しないMir Aḥmad Mašhādīなる書家 (これは注119でMuḥammad Ḥusayn Tabrizīの師として言及されたMir Sayyid Aḥmad Mašhādīを指すかもしれない) の名さえ挙がっているなど、本書との差異が際立っている。Mawlānā Muḥammad Ḥusayn Tabrizī, Mir Aḥmad Mašhādī, Mawlānā Ḥasan 'Alī Mašhādī, Mawlānā Šāh Muḥammad Nišāpūrī, Mir Mu'izz Kāshī, Mirzā Ibrāhīm Iṣfahānī [IAF: 265]。 (M)

124 Muḥammad Ḥusayn KašmirīはAkbar時代からČahāngīr時代にかけて活動した。本書AAに先行する彼の代表作としては、ヒジュラ暦990年 (1582/3) 年作成のSa'dī著 Gulistān写本 (Royal Asiatic Society所蔵。Pers. 258。書家の肖像画を含む彩飾を備えたコロフォンの写真は [Seyller 2001: 40]。このようなスタイルのコロフォンがムガル帝国時代の古写本に複数見られることについては [Das 1981; Seyller 2004: 108]。なおRoyal Asiatic Societyのホームページでこの写本全頁の画像を閲覧できる (URL: <https://royalasiaticcollections.org/ras-persian-258/>)、ヒジュラ暦992年 (1584/5) 作成のSa'dī著 Gulistān写本 (ウィンザーのロイヤル・コレクション所蔵 (RCIN 1005022) [Hannam 2018: 60-61]。この写本に付された書き込み等の詳細な書誌情報は [Seyller 1997: 312-313]。上記の年代もこの論文による。この写本の画像はロイヤル・コレクションのホームページで一部閲覧できる。URL: <https://www.rct.uk/collection/search#/20/collection/1005022/gulistan> 2019年8月19日閲覧)、さらにAbū al-Faḍlの念頭には、1595年2月ラホールで作成のĠāmī著 Bahārīstān写本 (Bodleian Library所蔵。MS. Elliott 254。この写本のコロフォンや書き込みに関する詳細な記述は [Seyller 1997: 336]) があった可能性もある。いずれにせよ、以上の優品の数々は、本書執筆時点に

という称号で世に知られている。マウラーナー・アブド・アルアズィーズ¹²⁵の弟子であるが、師よりも秀でており、彼の伸線字と曲線字は互いに釣り合いが取れている¹²⁶。目の利く者たちは、彼をムッラー・ミール・アリー¹²⁷に比肩するものと考えている。

彼のほかに、永遠を装飾としたこの王朝の光輝によって名声を博したのは著名なムッラー・ミール・アリーの息子マウラーナー・バーキル¹²⁸、ムハンマ

における Abū al-Faḍl の、この書家に対する抜群の評価を十分に裏書きする材料である。その他、1596 年ごろ作成の *Akbar Nāmāh* 写本（大英図書館所蔵。Or. 12988）[Seyller 1997: 335]、1601/2 年作成の Amir Ḥasan Dihlavi 著『詩集』写本（フダーバフシュ図書館所蔵。HL 329）[Abdul Muqtadir 1962: 196-198; Seyller 2001: 39] に加え、書画集 (muraqqa') の素材としてのこされた書蹟は数多くある。また 1607 年、Ġahāngīr は Kābul への道中にある狩場の近くに建てられたミナレットに同人がものした散文が彫りつけられていることを伝えている [JN (T) : 53, JN (A) : 44]。なおこの書家の没年については、MA の書家列伝がヒジュラ暦 1020 (1611/2) 年と伝えている [MA: 482]。一方西暦 1620 年没とする説もあるが、これが成り立ちがたいことは [Seyller 2001: 43, n. 9] の論ずるところである。しかるに両者が引証していない MR はヒジュラ暦 1025 (1616/7) 年に一応の完成を見たと考えられるが、この書物において同人が故人として扱われていることも MA の所伝を支える間接証拠である [MR: III, 1678]。(M)

125 Mawlānā 'Abd al-'Aziz. 詳細不明。同時代史料にはこの書家に比定できる人物を見いだせない。バヤーニーは Haft-Qalamī の書家列伝 Taḍkirah-i Ḥwus-nawisān (19 世紀前半) によってこの書家が Muḥammad Ḥusayn Kašmīrī の師であったことを紹介している [Bayānī 1363-1364 Sh.: I, 402-403]。しかしその根拠たる記述は、本書 AA の記事を典拠とした校訂注ではないから、この紹介は無意味である。(M)

126 伸線字 (maddāt)、曲線字 (dawā'ir) の解釈については英語訳の注に従った [AA (Etr.): I, 109, n. 4]。(M)

127 既出のマウラーナー・ミール・アリー・ハラウィーに同じ (注 104)。(M)

128 フダーバフシュ図書館には「Mullā Mir 'Alī の息子 Bāqir」の筆になるムガル帝国時代の古写本が所蔵されている [Abdul Muqtadir 1962: 145-146]。この写本に付された印章や署名についての詳しい記述は [Seyller 1997: 328]。また同人の書写になる Sa'di 著 *Gulistān* 写本（バータ・カーラー・バヴァン所蔵。no. 3/9935）の作成年代がヒジュラ暦 972 (1567/8) 年であり、この書写が港市 Sūrat で Mun'im Ḥan なる人物のために行われたことは、この書家の活動状況をうかがわせる材料である [Seyller 1997: 331]。ただしこの Mun'im Ḥan が当時 Ḥān-i Ḥān-ān の称号を帯びていた有力貴族のことを指すとする、その貴族は Sūrat や Guḡarāt 地方に居たことはないし、1567/8 年当時、彼はガンジス川中流域のいわゆる「東国」の鎮定に軍を率いていたから、この写本は遠地のパトロンに宛てて送り出されるべく、作成されたことになる。一方いわゆる Muraqqa'-i Gulšān の作成にあたり、彼が父 Mir 'Alī の書蹟を収録したことについては [Soucek (Eir) : 'Alī Heravi]。叙述史料としては INJ に、第 3 代君主 Akbar の乳兄弟 Mirzā 'Aziz (1625 年没) が書道をよくし、その師が「Mullā Mir 'Alī の息子 Mirzā Bāqir」だったとの記事が見える [INJ (B) : 230]。INJ のこの記事はラクナウ版には見えない異文であるが、Ġahāngīr Nāmāh の補遺部分には採録されているので、信頼を置いてよい情報

ド・アミーン・マシュハディー¹²⁹、ミール・フサイン・クランギー¹³⁰、マウラーナー・アブド・アルハイイ¹³¹、マウラーナー・ドゥーリー¹³²、マウラーナー・アブ

と考えられる [JN (T) : 477; JN (A) : 395]。また 'Abd al-Raḥīm Ḥān-i Ḥān-ānのもとに渡来した書家として「著名な書家 Mawlānā Mīr 'Alīの子 Mīrzā Bāqī」がMRに言及されている [MR: III, 1681]。このBāqīはことによるとBāqirの誤伝ないし誤写であり、つまりMRのこの記事は本書のMawlānā Bāqirを指している可能性もある。しかしMīrzā Bāqīは、MAhにおいて書家Mawlānā Mīr 'Alīの子としてナスターリークを得意とした人物として記録されているので、本書のMawlānā BāqirにはMīrzā Bāqīなる兄弟がいたものとさしあたり考えておくべきだろう [MAh: 270]。SoucekはMīr 'Alīの息子の名をMīr Muḥammad Bāqirと記しているが、その根拠は不明であるし、この名の人物が 'Abd al-Raḥīm Ḥān-i Ḥān-ānに奉職していたと断定できる根拠も不明である。(M)

129 Muḥammad Amīn Maṣḥadī. この書家は、Akbarの書院でMīr Kulang (注130) およびMīr Dūrī (注132) とともに『ハムザ物語』Qīṣṣah-i Ḥamzahの写本の浄書に従事した書家としてMShに言及されているḤāfīz Muḥammad Amīnに同じであろう [MSh: 54]。またGHにおいてMaṣḥad出身の書家として言及されているMawlānā Muḥammad Amīnと同じか。同人はMawlānā Šāh Muḥammadの弟子であり、後にインドに向かったという。Mawlānā Šāh MuḥammadはMawlānā Salīmの弟子であり、後者はMīr 'Alī Šīrのもとで活動したSulṭān Muḥammad Nūr (注96) の同時代の人であるというから、Akbar時代に活動した書家の年代として、不整合はないであろう [GH: 104]。なお 'Abd al-Raḥīm Ḥān-i Ḥān-ānの保護下で活動したMaṣḥad出身の写本装飾師 (muḍahhib) たるMullā Muḥammad Amīnと同一人物である可能性もある [MR: III, 1678]。(M)

130 MShに言及されるMīr KulangないしMīr Kulangīなる書家と同じであろう。この書家はHirātのサイイドの家系に属し、Buḥārāで育ち、Mīr 'Alīに書を学んだという。彼はMaḥmūd-i Ishāq (注107) とともにAkbarの宮廷に到来した。その後、Akbarの書院でMīr Dūrī (注132) およびḤāfīz Muḥammad Amīnとともに『ハムザ物語』Qīṣṣah-i Ḥamzahの写本の浄書に従事したという。またḤwāḡah Ḥusayn Marwīなる詩人と親交を結び、その詩集の書写も手がけた [MSh: 54, 120]。なおSeyllerは、1570年書写のĠāmi 著Yūsuf wa Zulayḥā写本 (現在所在不明。1994年10月のクリスティーズの売立に登場) に、その写字生が「Mīr Kalangīとして知られるMīr Ḥusayn al-Ḥusaynī」であることを示す記入があることを報告している [Seyller 1997: 305-306]。両者の年代に不整合はないが、Mīr Ḥusayn al-Ḥusaynīなる書家については不明であり、この写字生を本書の書家に特定できる証拠は十分ではない。(M)

131 既出の同名の書家 (ティムール朝君主Sulṭān Abū Sa'īd Mīrzāの書記。注78) とは当然別人である。Ḥazīnīの雅号をもつMawlānā 'Abd al-Ḥayy なる書家は当初、Mīrzā Kāmranに仕えていたが、この主人が失脚するとHumāyūnの書院に迎えられた。ヒジュラ暦970 (1562/3) 年、両聖都への巡礼に向かう途上のGuḡarāt地方で死去した [NM: 58v]。なおMawlānā 'Abd Allāh Āṣ-paz (Tabbāh) (注57) の弟子、かつMawlānā Šayḥ Kamāl Sabzawārīの師として、GHに言及されるMawlānā 'Abd al-Ḥayy/al-Ḥaqq Sabzawārīなる書家の名前にかかわるテキスト上の問題については注62参照。この問題ゆえ、GHのこの書家を本文のMawlānā 'Abd al-Ḥayyに同定できるか否かの判断は下せない。(M)

132 Mīr Dūrī. Akbar時代の伝記資料においては、その名をMīr Sulṭān BāyazīdというHirāt出身の能書家であったこと、ナスターリーク書体に秀で、Akbarのもとではkātib

ド・アッラヒーム¹³³、ミール・アブド・アッラー¹³⁴、ニザーミー・カズウィーニ

al-mulk「国の書記官」の称号によって遇されたとの所伝が共通しており、MTは同人が晩年に聖地巡礼を行ったとの情報を加えている[NM: 69v; HI: II, 159; TA: II, 494; MT: III, 227]。MShはより詳しい情報を伝えており、この書家がサイイドの家系に属していたこと、書家のMullā Qasim Šadi Šah(注100)に師事したこと、Akbarのもとで彼が製作した写本の中ではDuwal Rāni Hīḍr Hān(Amīr Husraw原作のロマンス)が最高の出来であること、巡礼の帰路、搭乗した船がSūrat港沖で座礁したために水死を遂げたことを伝えているが、その正確な時期は記さない[MSh: 77-78]。同書はさらにこの書家が『ハムザ物語』Qisṣah-i Hamzahの写本の浄書に従事したことも伝える(注107参照)[MSh: 54]。なお1587年にイスタンブルでMuṣṭafā 'Āliが完成させたManāqib al-Hunarwārānもこの書家に言及しており、彼がヒジュラ暦986(1578/9)年に「水に溺れて」死んだことを伝えている[MH: 240, 366]。インド国立博物館に所蔵されるDuwal Rāni Hīḍr Hān写本(L. 53.2/7)は、1568年にMīr Dūriとして知られる写字生Sultān Bāyazīd ibn Mīr Nizāmが作成したものであるが[Seyller 1997: 309]、この写字生はおそらく本文が指す書家のことであり、この比定が成り立つなら、この写本は同人の活動時期の参考材料ともなる。ことによるとこのインド国立博物館所蔵写本こそ、MShが指すものであるかもしれない。またヒジュラ暦967(1559/60)年の紀年句を有する碑文(Nāgawrの貯水池近くのモスク)には、作文者および筆耕者が「al-Dūriとして知られる kātib al-mulk」である旨、記録されている[Chaghtai 1954: 38-39]。年代を考慮すれば、この碑文の作文者を本書のMīr Dūriに同定して差し支えなからう。(M)

133 AkbarおよびĠahāngīr時代に活動した、ナスタアリーク書体の名手Mawlānā(ないしMullā)'Abd al-Rahīmを指しているであろう。'Anbarin-qalam(「龍涎香の筆」の意)の称号を得たこの書家は「Hūrasānから」インドに到来した当初、'Abd al-Rahīm Hān-i Hān-ānに仕え、その蔵書の書写を多数でがけた。ムガル帝国におけるその名声は「Mullā Muḥammad Ḥusayn Kaśmiriなきあと、彼の右に出る書家はHindūstānにはない」と伝えられるほどであるという[MR: III, 354, 1658, 1678]。この書家による写本の代表例としては、1593-95年にかけて製作されたNizāmī著Hamsahの写本(大英図書館所蔵。Or. 12208。この写本についての専著は[Brend 1995])、アクバル治世第49年(1604/5)書写のĠamī著Nafahāt al-Unsの写本(大英図書館所蔵。Or. 1362)[Seyller 1997: 290]、および1599/1600年書写のSanā'ī著Hadiqat al-Haqiqat写本(個人蔵)[Seyller 1997: 305]。なお上記のHamsah写本には、五部作を構成する各作品ごとにコロフォンがあるが、そのうち二箇所のコロフォンに含まれるこの書家の名前は、その父が「書家'Abd al-Hayy」、祖父が「書家'Alā' al-Dīn Muḥammad al-Harawī」であったことを示している[Brend 1995: 63-65]。しかしこの父と祖父がそれぞれ注131、注97の書家にあたるかどうか、確実には判断できない。(M)

134 Mīr 'Abd Allāh。MTには七書体に通じた書家であるばかりでなく、Waṣfīなる雅号の詩人として立伝されている。書に関してはŠah GiyāiおよびMawlānā Rāqīmīの弟子であったというが、この二人の師について詳細は不明である。さらに母方の血筋では、TAの著者たるNizām al-Dīn Aḥmad Harawīの親類と伝わる[MT: III, 383]。この書家のAkbar時代に属する作例としてはAmīr Ḥasan Dihlawīの『詩集』の写本がある(The Walters Art Museum所蔵W.650。この写本について詳しくは[Seyller 2004])。コロフォンからはこの写本が、ヒジュラ暦1011年ムハッラム月27日(1602年7月17日)にIlāhābād(Allahabad)で完成したことと、この書家が後年帯びたMiškin-qalam(「じゃ香の筆」の意)という称号が用いられていることを読み取れる(このコロフォンは、写

—¹³⁵、アリー・チャマン・カシュミリー¹³⁶、ヌール・アッラー、カーシム・

字生当人の肖像画を描き込んでいる。当の称号は写本本文に後続するコロフォンに見られ、書写の場所と日付は、肖像画の人物が手にした書面に書き付けられている。これらの文字情報を読み取れる図版は [Beach 1978: 39]。また所蔵館のホームページでもこの写本の画像を閲覧できる (URL: <https://manuscripts.thewalters.org/>)。この書家が1602年に Ilāhābād で活動していたことは、当時、王子 Salīm (後の君主 Ġahāngir) が父帝 Akbar に背いてその地に自らの宮廷を構えとともに、帝国のアトリエで活動していた画家、書家たちを引き抜いていった事実を反映している。この書家と王子との深い関係は、Ilāhābād のいわゆる Khusrau Bagh 所在の Šāh Begim 墓廟の墓石碑文にも見える (この碑文については [Desai 1962: 65-67; Begley 1985: 94])。Šāh Begim は王子 Salīm の妻であり、同王子の即位前、ヒジュラ暦1013年ズー・アルヒッジャ月26日 (1605年5月15日) にアヘンの大量摂取によって死んだ [JN (T) : 33]。ただしこの碑文に含まれる abḡad の紀年句 “bi-ḥuld šud biḡim” の与える数値は1012である。この重大な年代錯誤の理由は分からないし、従来研究も問題にしていない。また碑文において当の書家が “Ġahāngir Šāhi” という称号を帯びていることを考慮すると、その王子夫人の没年として記されるべき年代がいずれであったにせよ、この碑文が作成されたのはその王子が即位した1605年11月以降でなければならないことになる。また Ġahāngir 治世第10年 (1615/6年)、君主が当時滞在していた Aḡmēr において作成された碑文の筆耕者たる ‘Abd Allāh がこの書家であることを Tirmizi が指摘している [Tirmizi 1961: 55-57]。なおこの書家については著者不明の伝記が17世紀書写の孤本によって伝世しており、そこに見られる複数の紀年句によって、書家の没年はヒジュラ暦1025 (1616/7) 年ないし同1035 (1625/6) 年となるが [Ethé 1903: 316]、後代に属する文献史料 MA は前者の年代を伝える一方 [MA: 483]、Seyller は後者の年代に従っている [Seyller 2004: 97]。Mir ‘Abd Allāh の息子 Mir Šālih (1650年没) も書家として活動したことが MA に記録されており [MA: 483]、Šāh Ġahān の宮廷では御書院管理官 (dārūḡah-i kitāb-ḡānah-i mu‘allā) として奉職していたことが史料に見える [BNL: II, 414, 505, 679; BNW: 88r, 99v]。 (M)

¹³⁵ Nizāmī Qazwini. 詳細不明。同時代史料にはこの書家に比定できる人物を見いだせず、バヤーニーの網羅的な研究書にも言及はない。 (M)

¹³⁶ ‘Alī Čaman Kašmirī. 詳細不明。同時代史料にはこの書家に比定できる人物を見いだせず、バヤーニーの網羅的な研究書にも言及はない。 (M)

アルスラーン¹³⁷である¹³⁸。

参考文献：

一次資料

AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*. H. Blochmann (ed.), 2 vols., Calcutta, 1867-1877.

AA (Etr.): H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.). (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.

AA (Jtr.)(3): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳注 (3)」『紀要 (神戸大学文学部)』42, 2015, pp. 113-151.

137 Blochmannは底本と英語訳のいずれにおいても、Nūr AllāhとQāsim Arslānを一連の名前と見なしている [AA (Etr.): I, 109]。しかしQāsim ArslānにNūr Allāhという名称を付する史料の用例は他に無い。それゆえ本訳注では、この一節を、Nūr AllāhとQāsim Arslānという二人の名前を列挙したものと解釈した。Nūr Allāhなる人物を特定するための証拠は乏しい。1580年代後半、Akbar宮廷に到来し、後にシーア派列伝 *Maḡālis al-Mu'minin* をあらわしたQāḍi Nūr Allāh Šūštariが本書の指す人物である可能性はあるが、MTの詳細な伝記にも当人の書に関する素養を示す情報はない。この人物が本書の著者Abū al-Faḍlの兄Fayḍiと親交を結んでいたことも、状況証拠にしかない [MT: III, 137-138]。一方、Qāsim ArslānはṬūs出身であり、それゆえにṬūsīというニスバを伝える史料もある [NM: 24v; MT: III, 178]。同地近くの大都市Mašhadを同人の出身地と伝えたり [HI: II, 217; ArAsh: I, 577]、Mašhadiというニスバ [TA: II, 492; AA: I, 261; RT: 578v] を与えたりする別の伝記資料との相違は、問題とする必要がないであろう。Arslānという雅号の由来についてNMは、父Mawlānā Arslānに因むという説と、彼がガズナ朝君主のアミール Arslān Ġaḍibの子孫であることによるという説とを紹介している [NM: 24v]。MAhに見える詩人Qāsim ArslānはArslān Mašhadiの息子であるというが、この人物が本書の指すQāsim Arslānに同じであるかもしれない [MAh: 273-274]。同人の書道の素養はたしかに史料に伝えられているが [NM: 24v; HI: II, 217; TA: II, 492; MT: III, 178]、史料に見える主たる活動はAkbar宮廷における詩人として、とくに紀年句の詠み手としてのものである [NM: 31v; TAK: 130; THA: 161; TA: II, 228; MT: II, 41, 73, 98, 132, 136; III, 99, 171, 235; AN: II, 131, 235-6]。その死没については、1586/7年が没年であること、その場所がGuḡarāt地方のSarkheḡであることが伝わる [MT: III, 180; ArAsh: I, 577]。(M)

138 Akbar宮廷における本書の書家の列挙に対して、「アルバム序文」はMuḥammad Ḥusayn Kašmirīのみを簡単に挙げるに過ぎず、他の書家たちについては全く触れていない [IAF: 265]。一方、本書の書家の列挙が完全でないことは言うまでもない。例えば『マハーバーラタ』ペルシア語訳 *Razm Nāmāh* 写本 (マーン・スィング2世博物館所蔵。Acc. no. AG 1683-AG 1850) の写字生 'Ināyat Allāh [Chaghatai 1943/4: 291-292; Seyller 1997: 307]、『ラーマーヤナ』ペルシア語訳写本 (マーン・スィング2世博物館所蔵。Acc. no. AG 1851-AG 2026) の写字生 Mīr Muḥammad Taqī と Šayḥ Aḥmad Lāhawri [Seyller 1997: 308] のごとく、Akbarの書院を代表する優品に関与した書家の名は、本書に言及されていない。(M)

- AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
AA Ms. C: Ms. Add. 6552, British Library.
AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. Mawlawī Āghā Aḥmad ‘Alī & Mawlawī ‘Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877-1886.
ArAsh: Taqī Awḥadī, ‘*Arafāt al-‘Āshiqīn wa ‘Araṣāt al-‘Ārifīn*. Sayyid Muḥsin Nāḡī Naṣrābādī (ed.), 8 vols., Tihrān, 1388 Sh.
BN: Bābur, *Bābur Nāmah*. (Ed.) 間野英二『バーブル・ナーマの研究 I』松香堂 1995.
BNL: ‘Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Bādšāh-Nāmah*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & ‘Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Calcutta, 1866-1868.
BNW: Muḥammad Wārīṭ, *Bādšāh-Nāmah*. Ms. British Library, IO Islamic 324.
DDM: Dūst Muḥammad Harawī, *Dibāčah-i Dūst Muḥammad Gawāšānī Harawī*. Naḡīb Māyil Harawī (ed.), *Kitāb-ārā’i dar Tamaddun-i Islāmī*. Maṣhad, 1372 Sh., pp. 259-276.
DQM: Quṭb al-Dīn Muḥammad, *Dibāčah-i Quṭb al-Dīn Muḥammad Qīṣṣah-ḥwān*. Naḡīb Māyil Harawī (ed.), *Kitāb-ārā’i dar Tamaddun-i Islāmī*. Maṣhad, 1372 Sh., pp. 278-288.
DhKh: Farīd Bhakkārī, *Ḍaḥīrat al-Ḥawānīn*. Syed Moinul Haq (ed.), 3 vols., Karachi, 1961-1974.
GH: Qāḍī Aḥmad Qummi, *Gulistān-i Hunar*. Aḥmad Suhaylī Ḥwānsārī (ed.), Tihrān, 1352 Sh.
GH (Etr.): do. V. Minorsky (tr.), Washington D.C., 1959.
HI: Amīn Aḥmad Rāzī, *Haft Iqlīm*. Ġawād Fāḍil (ed.), 3 vols., Tihrān, n.d.
HS: Ḥwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*. 4 vols., Tihrān, 1333 Sh.
IAF: ‘Abd al-Ṣamad, *Inṣā-yi Abū al-Faḍl*. Lakhna’ū, 1280 A.H.
INJ: Mu’tamad Ḥān, *Iqbāl Nāmah-i Ġahāngīrī*. Lakhna’ū, 1870.
INJ (B): do. Mawlawī ‘Abd al-Ḥayy & Mawlawī ‘Abd al-‘Alī (eds.), Calcutta, 1865.
JN (A): Nūr al-dīn Muḥammad Ġahāngīr, *Ġahāngīr Nāmah*, Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeeepore & Ally Gurm, 1863-1864.
JN (T): do., *Ġahāngīr Nāmah*, Muḥammad Hāsīm (ed.), Tihrān, 1359 Sh.
KhA: Ḥwāndamīr, *Ḥulāṣat al-Aḥbār fī Bayān Aḥwāl al-Aḥyār*. Mīr Hāšīm Muḥaddīṭ (ed.), *Ma’āṭir al-Mulūk*, 1372 Sh., pp. 181-245.
LN: Sulṭān Muḥammad Faḥrī, *Laṭā’if Nāmah*. ‘Alī Aṣḡar Ḥikmat (ed.), *Maḡālīs al-Nafā’is*, Tihrān, 1323 Sh. (Reprint: n.d.), pp. 1-178.
MA: Muḥammad Baḥt-āwar Ḥān, *Mīr’āt al-‘Ālam*. Sāḡidah S. ‘Alawī (ed.), Lāhawr, 1979.
MAh: Bahā’ al-Dīn Ḥasan Buḥārī, *Muḍakkir-i Aḥbāb*. Naḡīb Māyil Harawī (ed.), Tihrān,

1377 Sh.

- MAI: Mustā'idd Ḥān, *Ma'āṭir-i 'Ālamgīrī*. Āgā Aḥmad 'Alī (ed.), Calcutta, 1870-1873.
- MH: Muṣṭafā 'Ālī, *Manāqib al-Hunarwarān*. E. Akın-Kıvanç (ed. & tr.), Leiden, 2011.
- MKh: Mir 'Alī Harawī, *Midād al-Ḥuṭūṭ*. Nağib Māyil Harawī (ed.), *Kitāb-ārā'i dar Tamaddun-i Islāmī*, Mašhad, 1372 Sh., pp. 87-101.
- MM: Nūr Allāh Šūštārī, *Mağālis al-Mu'minīn*. Sayyid Aḥmad 'Abd Manāfī (ed.), Tihrān, 1365 Sh.
- MN (P): 'Alī Šīr Nawā'ī, *Mağālis al-Nafā'is*. 'Alī Aşgar Hikmat (ed.), Tihrān, 1323 Sh.
- MN (T): 'Alī Šīr Nawā'ī, *Mağālis al-Nafā'is*. Süyimah Ġaniyiwā (ed.), Taškand, 1961.
- MR: 'Abd al-Bāqī Nihāwandī, *Ma'āṭir-i Raḥīmī*, M. Hidayet Hosain (ed.), 3 vols., Calcutta, 1924-1931.
- MSh: Qāṭi'ī Harawī, *Mağma' al-Šu'arā'-i Ġahāngīr Šāhī*. Muḥammad Salīm Aḥtar (ed.), Karāčī, 1979.
- MT: Badā'unī, *Muntaḥab al-Tawāriḥ*. M. A. 'Alī & Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), 3 vols., Calcutta, 1864-1869.
- MU: Šāh Nawāz Ḥān, *Ma'āṭir al-Umarā'*. Mawlawī 'Abd al-Raḥīm & Aşraf 'Alī (eds.), 3 vols., Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1887-1891.
- NM: 'Alā' al-Dawlah Qazwīnī, *Nafā'is al-Ma'āṭir*. Ms. Maulana Azad Library (Aligarh Muslim University), Subhan Allah 920/45.
- QKh: Maḥmūd b. Muḥammad, *Qawānīn al-Ḥuṭūṭ*. Nağib Māyil Harawī (ed.), *Kitāb-ārā'i dar Tamaddun-i Islāmī*, Mašhad, 1372 Sh., pp. 291-319.
- RJ: *Rawḍāt al-Ġinān wa Ġannāt al-Ġanān*, 2 vols. Ġa'far Sulṭān al-Qurrā'ī (ed.), Tihrān, 1344 Sh.
- Šifā' (Ṭabī'iyāt 6) : Ibn Sinā. *Psychologie d'Ibn Sinā d'après son œuvre aš-Šifā' (Kitāb al-šifā')* I, Texte arabe, Ján Bakoš (ed.), Prague, 1956.
- Šifā' (Ṭabī'iyāt 6) (Jtr) : イブン・シーナー『魂について 治癒の書 自然学第六篇』木下雄介 (訳)、知泉書館、2012年。
- TA: Nizām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. B. De & Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (eds.), 3 vols., Calcutta, 1913-1941.
- TAA: Iskandar Beg Munšī, *Tārīḥ-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī*. Īrağ Afšār (ed.), 2 vols., Tihrān, 1387 Sh.
- TAk: 'Arīf Qandahārī, *Tārīḥ-i Akbarī*, Ḥ. Mu'in al-Dīn Nadwī, A. 'Alī Dihlawī & I. 'Alī 'Aršī (eds.), Rampur, 1962.
- TG: Mir Abū Turāb Walī, *Tārīḥ-i Guḡarāt*. E. Denison Ross (ed.), Calcutta, 1908-1909.
- THA: Bāyazīd Bayāt, *Taḍkirah-i Humāyūn wa Akbar*. Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (ed.), Calcutta, 1941.

TR: Ḥaydar Mīrzā, *Tārīḥ-i Rašīdī*. 'Abbās-Qulī Ġaffārī Fard (ed.), Tihṛān, 1383 Sh.

TS: Sām Mīrzā Ṣafawī, *Tuḥfah-i Sāmī*. Nūr al-Dīn Humāyūn-farruḥ (ed.), n.d.

二次資料

Abdul Muqtadir, M. (1910) *Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts in the Oriental Public Library at Bankipore, volume II: Persian Poets (Kamāl Khujandī to Faydī)*, Calcutta (Reprint: Patna, 1988).

Abdul Muqtadir, M. (1962) *Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts in the Oriental Public Library at (Bankipore) Patna, volume I: Persian Poets (Firdausi to Ḥāfiẓ)*, Second Edition, Calcutta & Patna (Reprint: Patna, 1993).

Adle, C. (EIṛ) Dūst-Moḥammad Heravī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/dust-mohammad>).

Ashraf, M. (1986) *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Salar Jang Museum & Library*, Vol. 5. Hyderabad.

Bayānī, M. (1363-1364 Sh.) *Aḥwāl wa Ātār-i Ḥwuš-nawisān*. Tihṛān.

Beach, M. C. (1978) *The Grand Mogul: Imperial Painting in India, 1600-1660*, Williamstown, Mass.

Begley, W. E. (1985) *Monumental Islamic Calligraphy from India*, Villa Park.

Blair, S. S. (2003) Yāqūt and His Followers. *Manuscripta Orientalia*, 9(3), pp. 39-47.

Blair, S. S. (2006) *Islamic Calligraphy*. Edinburgh.

Brend, B. (1995) *The Emperor Akbar's Khamsa of Niẓāmī*, London.

Camps, G. et al. (EI2) Libiyā. *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0582).

Chaghatai, M. A. (1943/4) The Illustrated Edition of the Razm Nama (Persian Version of the Mahābhārata) of Akbar's Court. *Bulletin of the Deccan College Research Institute*, 5, pp. 281-329.

Chaghtai, A. (1954) Some Inscriptions from Jodhpur State, Rajputana. *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1949-1950, pp. 18-53.

Clarke, C. S. (1922) *Indian Drawings: Thirty Mogul Paintings from the School of Jahāngīr (17th century) and Four Panels of Calligraphy in the Wantage Bequest*, London.

Das, A. (1981) Calligraphers and Painters in Early Mughal Painting. In: A. Krishna (ed.), *Chhavi-2*, Benares, pp. 92-97, figs. 271-288.

Desai, Z. A. (1962) Inscriptions from the Khusraw Bagh, Allahabad. *Epigraphia Indica. Arabic and Persian Supplement*, 1961, pp. 64-68.

Ekhtiari, M. (EIṛ) Jamālī Ṣufī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/jamali-sufi>).

- Eslami, K. (EI^r) ‘Emād Ḥasanī, Mīr, ‘Emād-al-Molk. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/emad-hasani-mir>).
- Ethé, H. (1903). *Catalogue of Persian Manuscripts in the India Office Library*. Volume I, Oxford.
- Ettinghausen, R. (EI²) Bihzād. *Encyclopaedia of Islam. Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_1408).
- Fleisch, H. (EI²) Kasra. *Encyclopaedia of Islam. Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_COM_0463).
- Fück, J. W. (EI²) Abu’l-Aswad al-Du’ali. *Encyclopaedia of Islam. Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_0159).
- Gholami, Y. & Negahban, F. (EIs) ‘Abd al-Karīm Khwārazmī. *Encyclopaedia Islamica*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_SIM_0056).
- Gholami, Y. & Umar, H. (EIs) ‘Abd al-Raḥīm Khwārazmī. *Encyclopaedia Islamica*. Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_SIM_0063).
- Gruendler, B. (EQ) Arabic Script. *Encyclopaedia of the Qur’ān*. Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922_q3_EQCOM_00016).
- Hannam, E. (2018). *Eastern Encounters: Four Centuries of Paintings and Manuscripts from the Indian Subcontinent*, London.
- Huart, C. (1908) *Les calligraphes et les miniaturistes de l’Orient Musulman*. Paris.
- Leach, L. Y. (1995) *Mughal and Other Indian Paintings from the Chester Beatty Library*, London.
- Manz, B. F. (EI²) *Shāh Rukh*. *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_6751).
- Miller, I. (EIs) Blue Mosque of Tabriz. *Encyclopaedia Islamica*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_SIM_05000013).
- Mordtmann, J. H. (EI) Ḥimyar. *Encyclopaedia of Islam, First Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/2214-871X_ei1_SIM_2811).
- Mūzah-i Hunar-hā-yi Mu’āshir-i Tihṛān (1384 Sh.) *Šāhkār-hā-yi Nigārgarī-yi Īrān*. Tihṛān.
- Porter, Y. (1989) Une traité de calligraphie attribué à ‘Abd-Allāh Şeyrafi. *Studia Iranica*, 18, pp. 55-58.
- Rettig, S. (2017) Ja’far Tabrizi, “Second Inventor” of the Nasta’liq Script, and the Diez Albums. In: J. Gonnella et al. (eds.) *The Diez Albums: Contexts and Contents*. Leiden, pp. 194-217.
- Rieu, C. (1879-1883) *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, London.
- Rosenthal, F. (1948) Abū Ḥaiyān al-Tawḥīdī on Penmanship. *Ars Islamica*, 13, pp. 1-30.
- Roxburgh, D. J. (2001) *Prefacing the Image: The Writing of Art History in Sixteenth-Century*

Iran. Leiden.

- Sellheim, R. (EI2) al-Khalil b. Aḥmad. *Encyclopaedia of Islam. Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_4161).
- Semsar, M. H. (EIs) Aḥmad al-Suhrawardī. *Encyclopaedia Islamica*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_COM_0227).
- Semsar, M. H. & Umar, S. (EIs) Aḥmad Tabrizī. *Encyclopaedia Islamica*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_COM_0326).
- Seyller, J. (1997) The Inspection and Valuation of Manuscripts in the Imperial Mughal Library. *Artibus Asiae*, 57(3/4), pp. 243-349.
- Seyller, J. (2001) *Pearls of the Parrot of India: The Walters Art Museum Khamsa of Amīr Khusraw of Delhi*, Baltimore.
- Seyller, J. (2004) The Walters Art Museum Diwan of Amir Hasan Dihlawi and Salim's Atelier at Allahabad. In: R. Crill et al. (ed.), *Arts of Mughal India: Studies in Honour of Robert Skelton*, Ahmedabad, pp. 95-110.
- Simpson, M. S. (1997) *Sultan Ibrahim Mirza's Haft Awrang: A Princely Manuscript from Sixteenth-Century Iran*, New Haven / Washington, D.C.
- Soucek, P. (2003) Calligraphy in the Safavid Period 1501-76. In: J. Thompson & S. R. Canby (eds.), *Hunt for Paradise: Court Arts of Safavid Iran, 1501-1576*, Milan, pp. 49-72.
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Abdallāh Heravī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/abdallah-heravi-mid-15th-century-calligrapher-active-in-herat-samarqand-and-mashad>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Abdallāh Ṣayrafī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/abdallah-sayrafi-calligrapher>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Abd-al-Karīm K̲'ārazmī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/abd-al-karim-karazmi>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Abd-al-Raḥīm K̲'ārazmī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/abd-al-rahim-karazmi>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Abdī Nīšāpūrī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/abdi-nisapuri-16th-century-calligrapher-and-poet>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Alī Heravī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/ali-heravi>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Alī Qā'enī. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/ali-qaeni-calligrapher>).
- Soucek, P. P. (EI^r) 'Alī Tabrizī (calligrapher). *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/ali-tabrizi-calligrapher>).
- Stronge, S. (2002) *Painting for the Mughal Emperor: The Art of the Book 1560-1660*, London.

- Thackston, W. (EIr) Ektīār Monši, K'āja. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/ektiar-monsi>).
- Tirmizi, A. A. (1961) Persian Inscriptions at Ajmer. *Epigraphia Indica. Arabic and Persian Supplement*, 1957-1958, pp. 43-70.
- Vajda, G. (EI2) Idris. *Encyclopaedia of Islam. Second Edition*, Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_3491).
- Waley, M. I. et al. (EIs) Calligraphy. *Encyclopaedia Islamica*. Brill Online (http://dx.doi.org/10.1163/1875-9831_isla_COM_05000067).
- Welch, S. C. et al. (1987) *The Emperor's Album: Images of Mughal India*, New York.
- Wright, E. (2003) The Calligraphers of Širāz and the Development of Nasta'liq Script. *Manuscripta Orientalia*, 9(3), pp. 16-26.
- Wright, E. (ed.) (2008) *Muraqqa': Imperial Mughal Albums from the Chester Beatty Library*, Alexandria, Virginia.
- Yūsufi, Ġ.-Ĥ. (EIr) Calligraphy. *Encyclopaedia Iranica*, online edition (<http://www.iranicaonline.org/articles/calligraphy>).
- 久保一之 (1990) 「ミール・アリー・シールの学芸保護について」『西南アジア研究』32, pp. 21-55.
- 田中敏雄 (1981) 「インド系文字の発展」西田龍雄編『講座言語 第5巻 世界の文字』大修館書店, pp. 181-210.
- 谷口勇 (1981) 「イブン・シーナーの音声学」『桃山学院大学人文科学研究』17 (1), pp. 45-88.
- 内記良一 (1981) 「アラビア系文字の発展」西田龍雄編『講座言語 第5巻 世界の文字』大修館書店, pp. 159-180.
- 真下裕之 (1999) 「Akbar NāmahとṬabaqāt-i Akbarī: manṣab制度史研究序説」『西南アジア研究』51, pp. 43-74.
- 真下裕之 (2014) 「ムガル朝インドの写本と絵画」小杉泰・林佳世子編『イスラーム 書物の歴史』名古屋大学出版会, pp. 279-297.

【補注】

以下は、本書AAのテキストの一部を「アルバム序文」と対照させた結果である。AAの該当部分は、本訳注の83頁第1行「文字がなければ、」から84頁第4行「視覚の街道から戻るのである」までである。左段においてAAのテキストを一文ごとに分節し、右段に「アルバム序文」を対応させる。「アルバム序文」のテキストがAAに無い要素を呈している箇所には下線を施し、AAとは異なる表現を呈している箇所には波線を施した。注5において説明したごとく、「アルバム序文」がAAの「要約」とであるという著者の説明とはかなり食い違う結果が得られていることに注意すべきである。

[AA: I, 112]

agar ḥaṭṭ na-būd-i suḥan zandah-gānī
na-dāšt-i wa dil rā az guḍaštah-g-ān
armaḡānī na-rasid-i

ṣūrat-bīn-ān paykar-i dūdah angār-and
ma'nī-parast-ān čirāḡ-i šināsā'ī

zulmat-i ast bā hazār-ān furūḡ nay-nay
nūri-st bā ḥāl-i čašm nā-rasidah-gī

naqš-nigār-i āḡāhī-i sawād-i šahristān-i
ma'nī tār-i šabī ast ḥwuršid-zā siyah
abri-st dāniš-bār

bar ganḡīnah-i bīnā'ī šigarf ṭilismī ast
ḡamūš-i ḡūyā wa bā ḡā-māndah-gī
rawā'ī dār-ad wa bā uftādah-gī buland-
parwāzī

az 'ilm-zār-i izadī partaw-i bar nafs-i
nāṭiqah uft-ad dil ū rā bi-šahristān-i
ḡiyāl kih barzaḡī ast dar muḡarrad wa
māddī firist-ad

[IAF: 259]

agar ḥaṭṭ na-būd-i suḥan zindah-gānī
na-dāšt-i wa dil rā az guḍaštah-hā
armaḡānī kam-tar rasid-i

ṣūrat-bīn-ān paykar-i dūdah angār-
and wa ma'nī-dān-ān naqil-hā-yi čirāḡ-i
ma'rifat šinās-and

zulmat-i-st dar way hazār-ān nūr bal
nūri-st kih ḥāl-i nā-rasidah-gī-i čašm bā
ḡwud dār-ad

naqš-nigār-i iqlim-i āḡāhī-st bal sawād-i
a'zam-i šahristān-i ma'ānī šab-i tāri-
st kih bawāriq-i ḡuṣ-afzā bā ū-st abr-i
siyah-i-st kih bār-ān rawšan-ī ār-ad

ṭilism-i-st ganḡīnah-i ma'nī rā kih bā
uftādah-gī rawānī dār-ad wa bā ḡamūšī
ḡūyā'ī wa bā ḡā māndah-gī buland
parwāz-i čūn na't-i kawn-i ān nādirah-
muḡtara' niwištah āmad paywand-i ilāhī
ū nigāštah mī-šaw-ad

muqaddasāt-i ma'nawī az bār-gāh-i 'ilm-i
izad-i-i nisbat-i ḡaṣṣ kih nafs-i nāṭiqah
rā bi-ān ḡanāb-i kibriyā-yi aḡadiyat-
ast andak-i az bisyār-i dar-ān gawhar-
āmūd-i taḡarrud lam'ah-i zuḡūr baḡš-ad
wa sulṭān-i dil ū-rā bi-šahristān-i ḡiyāl
kih dar ma'nī barzaḡī-i-st dar miyān-i
muḡarrad wa māddī firist-ad

tā tağarrudī ta'alluq-āmiz wa iṭlāqī
taqayyad-āmūd padid ā-y-ad

wa az-ān-ğā gām bar bām-i zabān
nihādah bi-dast-yārī-i hawā bi-daričah-i
gūš dar-ā-y-ad wa

sipas pāyah pāyah bār-i ta'alluq az dūš
bar-afkandah bi-ğā-yi ḥwiš bāz šitāb-ad
wa

gāh ān musāfir-i āsmānī-sayr rā bi-
madad-gārī-i banān čālīš diḥ-ad wa

az-ān-ğā barr wa baḥr-i qalam wa midād
dar nawardidah bi-nuzhat-ābād-i šafā'ih
bār kušā-y-ad wa az šāhrāh-i didah bāz
gard-ad

tā tağarrudī bā ta'alluq wa iṭlāqī bā
taqayyud iktisāb namā-y-ad

wa az-ān-ğā gāh bar bām-i zabān
šitāftah bi-daričah-i gūš furūd āmadah

marḥalah marḥalah rawābiṭ-i ta'alluq
gudāštah bi-ḥalwat-kadah-i dil mī-
šitāb-ad wa az-ān-ğā bi-wahdat-sarā-yi
taqaddus ruḡū'-i ša'ūd-i mī-kun-ad wa

gāh farmān-rawā-yi dil ān musāfir-i
āsmānī-sayr rā bi-rāḥilah-i zabān bi-
wādi-i ayyādī rawānah mī-sāz-ad wa

az-ān-ğā bah barr wa baḥr-i qalam wa
midād 'ubūr namūdah bar fushat-ābād-i
šafḥah-i ḥusn maḥmil mī-gušā-y-ad wa
az-ān-ğā bār-i aqāmat bastah az šāh-
rāh-i bāširah bi-dār al-mulk-i haqiqat
ṭabal-i rahil buland-āwāzah mī-sāz-ad
wa bāyad dānist kih har rāh-naward-i rā
kih az dār al-'ilm-i dil bi-'amal-ḥānah-i
sūrat ā-y-ad sawā-yi ān marāḥil kih
guftah šud čahār manzil-i digar-ast kih
qāfilah-i ma'nī az-ān bi-gudar-ad wa ān
'ibarat az čahār ḥalat-ast čah awwal dar
dil-i andišah-i ān kār padid ā-y-ad kih
ān-rā ḥatir nām-and wa hadīt-i nafs gū-
y-and duwwum dil rā inḡidāb namā-y-
ad wa ḥalaḡān padid ā-y-ad kih ān-rā
mayl wa hayaḡān ḥwān-and siwwum dil
'azimat-i ḡazm dar sar gīr-ad čahārūm
ān kār az pardah-i ḥafā bi-muḡallā-
yi zuḥūr šitāb-ad bāyad kih ḡuyā-

yi āgāhī nigāh-i-i žarf dar-in manāzil
wa marātib-i āmadan wa bar gaštan-i
hawdağ-nišin-ān-i ma'nī kun-ad tā basā
az haqā'iq-i tağarrud wa ta'alluq čihrah-
gušā wa ġilwah-numā gard-ad